図書館雑誌 The Library Journal
2023 11 Vol.117 No.11

VOL.117 NO.11 CONTENTS

窓●地域社会の中の書店と図書館 ―― 新　出 676

こらむ図書館の自由●
個人情報保護制度の一元化と図書館 ―― 松井正英 679

●NEWS ―― 677
告知板 … 678／新聞切抜帳 … 680

＊　＊　＊

[特集]
表現する図書館員
―書くことのすすめ

図書館員が執筆するということ ―― 呑海沙織 682
現場で感じたモヤモヤを「見える化」して－認定司書オリジナル論文著作体験記 ―― 大江ひとみ 686
専門図書館で書くということ－アジア経済研究所図書館の情報発信 ―― 坂井華奈子 688
医学図書館員として，興味を持って進めてきたこと ―― 城山泰彦 690
「小さな気付き」を書いて残すこと ―― 伊藤民雄 692
司書の仕事を書くこと ―― 高田高史 694

＊　＊　＊

日本図書館協会学校図書館部会第51回夏季研究集会東京大会●
学校図書館の役割を問い直す ―― 高橋恵美子 698

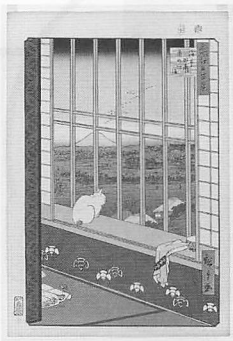
資料●
令和６（2024）年度予算における図書館関係地方交付税について（要望） ―― 公益社団法人日本図書館協会 712

霞が関だより●第240回
令和５年度新任図書館長研修 ―― 文部科学省 696

小規模図書館奮戦記●その306／早稲田大学国際文学館（村上春樹ライブラリー）
呼吸をはじめたライブラリー ―― 高橋由里子 703

●編集委員会
〈委員長〉
松本哲郎（市原市立中央図書館）
〈委員〉
青柳英治（明治大学文学部）
岩永知子（相模原市立図書館）
宇野亮一（国立国会図書館）
中村保彦（元文教大学図書館）
長谷川優子（元埼玉県立図書館）
宮原柔太郎（日本体育大学図書館）
米山　薫（多摩市立図書館）
＊
●事務局スタッフ
秦　秀文・川下美佐子・星川智隆

・今月の表紙
東京国立博物館所蔵
「名所江戸百景・浅草田甫 酉の町詣」（部分）
歌川広重筆
1857（安政４年）
〈国立文化財機構所蔵品統合検索システム〉



れふぁれんす三題噺●連載その三百六／国際教養大学中嶋記念図書館の巻
生成AI時代のレファレンスサービスとは ―― 相場洋子 704

図書館員のおすすめ本●㉝
お金の流れで読み解く　ビートルズの栄光と挫折 ―― 北嶋大祐 706
弱い力でも使いやすい頼もしい文具たち ―― 前田幸子 706
理数探究の考え方 ―― 米田　渉 707
マッピング思考 ―― 古澤理恵 707

各地の代議員から●⑦
地域図書館団体との協力体制強化を！ ―― 長田和彦 708
議論の前提となる正確な統計の公表を ―― 本山雅一 708

図書館員の本棚●
調べる技術 ―― 鈴木宏宗 709

北から南から●
避難民危機におけるポーランドの図書館の対応
―― リリアンナ・ナレヴァイスカ／マウゴジャータ・ドゥトカ訳 710

＊　＊　＊

●*The Library Journal, November 2023*
Special feature: Librarians' expression－Recommendations for writing
Librarians and writing（DONKAI Saori） 682
Visualizing the feeling that something is not right at work－Experience of a certified librarian writing an original thesis（OE Hitomi） 686
Writing in a special library－Information dissemination by the Institute of Developing Economies Library（SAKAI Kanako） 688
What I have done to further my interests as a medical librarian（KIYAMA Yasuhiko） 690
Writing down and passing on small notices（ITO Tamio） 692
Writing the work of librarians（TAKADA Takashi） 694

●日図協図書館新着案内 ―― 717
●編集手帳 ―― 724
事務局カレンダー　724

＊「新館紹介」「ウチの図書館お宝紹介！」「協会通信」は休載させていただきました。

●図書館雑誌12月号予告 ―― 723

●発行者
公益社団法人日本図書館協会©2023
〒104-0033 東京都中央区新川1-11-14
電　話（03）3523-0811〈代表〉
直　通（03）3523-0816〈編集部〉
ＦＡＸ（03）3523-0841〈代表〉
〈日図協ホームページURL〉
https://www.jla.or.jp
〈JLAメールマガジン申込先アドレス〉
mailmaga@jla.or.jp

＊本文は中性紙（冷水抽出pH8.1）を使用

窓

地域社会の中の書店と図書館

新出

書店業界からの支援要請を受けた自民党の「街の本屋さんを元気にして、日本の文化を守る議員連盟」は、二〇二三年四月二八日付で第一次提言[1]をとりまとめ、政府に取り組みを求めた。図書館に関係する部分としては、過度な複本の禁止や地元書店からの優先仕入れ、入札による過度の値引き、図書館と書店との連携などが挙げられている。

書店数は過去二〇年で半分近く、過去一〇年で約三割減少しており、「街の本屋」の閉店が急速に進んでいる。その原因は複合的だろうが、出版不況とりわけ雑誌の販売額の減少、ネット書店や電子書籍の普及など、メディアを取り巻く状況と利用・購買行動の変容が大きいだろう。書店だけではなく、メディアに関わるあらゆる業種―もちろん図書館も―が変化を迫られている。丸善CHIホールディングス株式会社のセグメント別営業利益[2]を見ると、店舗販売の利益は非常に少なく、図書館への書籍販売や運営業務受託が営業利益の多くを占めている。必ずしも本が読まれていない・売れていないのではなく、委託配本と粗利率の低さといった日本の新刊書店特有のビジネスモデルが成り立たなくなっているのではないだろうか。図書館の複本が焦点化されているが、出版、流通、書店経営の構造的課題に比べて、どの程度影響のある問題なのかという疑問も浮かぶ。

議連の提言は、探索購買型のニーズや未知の本との出会いの創出といった点で書店に強みがあり、地域社会に根ざした文化的・知的空間としての価値を訴えている。これらは（公共）図書館の存在意義とも相当程度重なるものだ。書店に期待されている―出版物を売るというビジネスを超えた―文化的機能やコミュニティ機能が地域に本当に必要だとしたら、公営書店などの施策も要請されるだろう。それとも図書館分館の設置で代替すべきだろうか？

地域における知識・情報・文化資源へのアクセス環境（知的環境）の整備という目的に対して、図書館の設置・運営はその手段である。図書館だけでそれが可能となるのではなく、書店、古書店、インターネット接続環境、学校、各種教育機関、地域文化資源機関、企業・住民の諸活動等の中で、地域の知的環境が形成される。書店や図書館への施策を考えるにあたっては、自治体の教育政策・文化政策・情報政策を横断した社会的な議論が必要である。

(1)「書店・図書館等関係者における対話の場の開催について」参考資料4 https://www.jpic.or.jp/topics/2023/09/27/170000.html

(2)丸善CHIホールディングス株式会社 セグメント情報 https://www.maruzen-chi.co.jp/ja/ir/finance/segment.html

（あたらし いずる／富谷市図書館等複合施設開館準備室）

NEWS

第1回書店・図書館等関係者における対話の場を開催

書店・公共図書館・出版社・著者・自治体の関係者が参加する，「書店・図書館等関係者における対話の場」の第1回が2023年10月3日(火)にオンラインで開催された。

これは，文化拠点としての書店等の振興，子どもの読書活動，文化活動の推進等につながる取り組みの支援，著者，出版社，書店と図書館との共存・共栄による新たな価値創造の推進を趣旨とするものとなる。

座長および副座長の選出が行われた後，副座長となった，出版文化産業振興財団の松木修一専務理事と日本図書館協会の岡部幸祐専務理事兼事務局長から，書店と図書館等をめぐる現状と課題，今後のあり方についての報告があり，続いて座長となった日本大学の大場博幸教授から「公共図書館の所蔵・貸出と新刊書籍市場との関係」についての報告が行われた。

その後，各構成員が，著者，出版社，書店，図書館等の立場から意見を述べ，これらの意見を踏まえて，次回には，書店・図書館等が共に目指す方向性について検討することとなった。

書店・図書館等関係者における対話の場の開催について（出版文化産業振興財団）：https://www.jpic.or.jp/topics/2023/09/27/170000.html

▶2024年IFLA大会（ドバイ）の開催中止について

10月3日，国際図書館連盟（IFLA）のヴィッキー・マクドナルド会長は，来年8月に予定されていたIFLAドバイ大会について，エミレーツ図書館情報協会から辞退の申し出があったと発表した。

開催をめぐっては，今年6月の発表後，会員から反対意見も多く，7月に諮問型の投票が行われ，これを受けて，8月のロッテルダム大会で，いったんは開催の旨，正式発表されていた。

これに伴い，来年のIFLA大会は非開催の見通しとなっている。

参照：https://www.ifla.org/news/wlic-2024-withdrawn/

▶日本図書館協会児童青少年委員会が意見表明

2022年10月，第108回全国図書館大会群馬大会第6分科会（図書館情報学教育）にて「大学において履修すべき図書館に関する科目」（案）が公表された。この案は，「児童サービス論」を必修科目から選択科目に変更しようとする内容となっている。これに対し，児童青少年委員会では，公共図書館の現状とかけ離れ，公共図書館の発展に禍根を残すものであると考え，反対の意思を表明するとして，意見書を協会Webサイトの児童青少年委員会のページに記載している。

児童青少年委員会「お知らせ」：https://www.jla.or.jp/committees/jidou/tabid/275/Default.aspx

▶第43回（2023年）児童図書館員養成専門講座終了

第43回（2023年）児童図書館員養成専門講座が，前期は6月26日(月)～7月1日(土)，後期は9月25日(月)～10月4日(水)（9月30日は休み）の日程で，日本図書館協会研修室，東京子ども図書館，東京都立多摩図書館，国立国会図書館国際子ども図書館を会場に開講された。

修了生は以下の通り。荒木里衣（名古屋市鶴舞中央図書館），伊藤恵理（横浜市磯子図書館），占部友香里（調布市立図書館若葉分館），大島真由美（世田谷区立桜丘図書館），岡本みのり（浦安市立中央図書館），加納宏美（岐阜県図書館），嶋田陽子（葛飾区立中央図書館），武田夏実（さいたま市立春野図書館），千葉水望（宇都宮市立南図書館），都丸智子（三鷹市立三鷹図書館），古井明香里（広島市こども図書館），堀内ゆうき（福井市立桜木図書館），松山友恵（練馬区立光が丘図書館），水野優子（鎌倉市玉縄図書館），山田あや（山梨県立図書館），吉井嘉奈子（東京都立多摩図書館）（五十音順・敬称略）。受講生たちの今後の活躍を期待したい。

当講座は，2024年も開催する予定である。本誌綴込（2024年2月号を予定）および児童青少年委員会HPにて告知するので，そちらをご確認の上，お申し込みいただきたい。

▶会員ポータルサイトを開設

日本図書館協会では，会員向けのポータルサイトを新設した。

会員ポータルサイトでは，協会からのお知らせを随時確認できるほか，会員登録情報の変更を自身で行うことが可能になる。また，今後は本ポータルサイトを通じて会員限定の案内の掲載や，会員同士の交流の場を設けるなど，さらなるサービスの拡充も計画している。

日本図書館協会会員ポータルサイトログインURL：https://jla.smartcore.jp/

NEWS

告知板

●つどい

■第34回保存フォーラム

国立国会図書館では，図書館における資料保存対策や技術について，実務者が情報共有，意見交換を行うことを目的として，下記のとおり第34回保存フォーラムを実施します。

今年もウェブ会議サービスにより事前に収録した講演動画を一定期間オンライン配信します。

主催：国立国会図書館

開催期間：2023年12月13日（水）～2024年1月16日（火）

開催形式：オンライン録画配信（参加登録者限定）

テーマ：フィルムと写真－劣化のしくみと保存対策－

内容：報告1：東京都写真美術館における写真の保存（山口孝子：東京都写真美術館保存科学専門員），報告2：東京大学経済学図書館におけるマイクロフィルムの保存対策と保存環境について（小島浩之：東京大学大学院経済研究科講師），報告3：写真の支持体とTACベースフィルムの劣化について（梅本眞：フジフイルムスクエア・コンシェルジュ），報告4：国立国会図書館におけるマイクロフィルム劣化対策の現況（仮題）（吉井伶奈：国立国会図書館収集書誌部資料保存課主査兼保存企画係長）

対象：図書館員等の資料保存に関心のある方

参加費：無料

定員：なし

申込方法：国立国会図書館ホームページをご覧いただき，参加申込みページからお申し込みください。ホーム＞イベント・展示会情報＞第34回保存フォーラム　https://www.ndl.go.jp/jp/event/events/preservationforum34.html

申込締切：2023年12月5日（火）17:00

問合先：国立国会図書館　収集書誌部資料保存課　☎03-3506-5219（直通）　E-mail：hozonka@ndl.go.jp

■令和5年度東日本大震災アーカイブシンポジウム－震災遺産と地域文化の継承を目指して－

国立国会図書館は，東北大学災害科学国際研究所との共催により標記シンポジウムを開催します。是非ご参加ください（参加費無料）。

日時：2024年1月8日（月曜・祝日）13:00-16:00

開催方法：有観客およびオンライン（ウェブ会議システム（Zoom）による事前登録者への同時配信）

内容：事例報告＝震災後収集資料の整理・活用における現状と課題（苧坪祐樹：大熊町教育委員会教育総務課副主任学芸員），とみおかアーカイブ・ミュージアムの歴史資料と震災遺産の保存活用（三瓶秀文：富岡町教育委員会生涯学習課課長補佐），震災遺構浪江町立請戸小学校が伝えたいこと，今後の課題について（渡邊祐典：浪江町教育委員会事務局生涯学習課社会教育係主査），双葉町における震災資料保全の取り組みについて（橋本靖治：双葉町総務課長兼秘書広報課長）／進捗報告＝これからのアーカイブに望むこと－ポータルサイト「ひなぎく」の経験から－（井上佐知子：国立国会図書館電子情報部主任司書），震災アーカイブの意義について－みちのく震録伝の経験から－（柴山明寛：東北大学災害科学国際研究所准教授）／パネルディスカッション＝進行：柴山明寛，パネリスト：上記報告者全員

申込方法：下記URLのシンポジウム案内にある申し込みフォームから

申込先：https://shinrokuden.irides.tohoku.ac.jp（みちのく震録伝）

定員：会場120名，オンライン300名（先着順）

問合先：東北大学災害科学国際研究所　災害人文社会研究部門　災害文化アーカイブ研究分野　担当：柴山　☎022-752-2099　E-mail：archiveforum@irides.tohoku.ac.jp

■2023年度I-LISS Japan Chapter研究大会開催

本誌9月号NEWS欄に関係記事が掲載されたI-LISSの日本支部が研究大会を開催します。どなたでも参加できます。

主催：I-LISS Japan Chapter（国際図書館情報学会日本支部）

研究大会テーマ：図書館情報学研究時空の連携

日時：11月25日（土）13:30-17:00

会場：日本図書館研究会　事務局会議室（大阪市西区江戸堀2-7-32 ネオアージュ土佐堀205号室）

内容：合同研究発表＝1（13:40-14:20）奴隷解放宣言から公民権運動期に見る全米大陸の黒人図書館員の道のりPart 2（原田安啓：元

NEWS

姫路大学教授），2（14:20-14:50）20世紀以前のアメリカの公立学校の図書館（大城善盛：元同志社大学・浅川功治（甲南学園甲南小学校）※日本図書館研究会比較図書館情報学研究グループ2023年11月研究例会と共催／招待講演（予定）＝1（15:00-16:00）スリランカの図書館について（仮題）（Prasanna Ranaweera：コロンボ大学図書館情報学研究所），2（16:00-17:00）Current Status and Future Prospect of Korean Public Libraries, with a special regard to after-COVID 19 Pandemic Situation（呉東根：I-LISS会長）

参加費：無料

問合先：中村恵信（事務局長）E-mail：toshokanshiryouhozon@yahoo.co.jp

■日本図書館研究会第14回国際図書館学セミナー

テーマ：図書館DXの可能性：日本・中国における変革の潮流と実践的取り組み

主催：日本図書館研究会，上海市図書館学会

共催：情報知識学会

日時：12月2日（土）13:30-16:40・12月3日（日）10:00-16:30

会場：同志社大学今出川キャンパス良心館RY203教室

申込：事前申込要（11月24日締切）

詳細HP：https://www.nal-lib.jp/2023kokusai/

全国図書館大会開催予定

・2024（令和6）年110回　長崎県
・2025（令和7）年111回　愛媛県
・2026（令和8）年112回　石川県

こらむ 図書館の自由

個人情報保護制度の一元化と図書館

松井正英

2021年に改正された個人情報保護法の，地方公共団体に関する規定が2023年4月1日から施行された。これまでは，法律だけで3本，さらに地方公共団体ごとに条例が制定されていて，規定の内容や解釈の仕方がさまざまという状況があった。一方で，社会全体のデジタル化に対応して，個人情報保護とデータ利活用の円滑化との両立を図るために，ルールや運用の統一を求める声が主に民間から高まっていた。今回の法改正は，全国的な共通ルールを法律で規定することを目的に行われた。

これに伴って地方公共団体は，従来の個人情報保護条例を廃止して，新たに個人情報保護法施行条例を制定するなどの対応が求められた。法改正の趣旨から，法に委任規定が置かれている事項や単なる内部の手続きに関する事項等を除いては，条例で独自の規定を定めることは認められていない。たとえば，他の情報との照合による特定個人の識別については，“容易に”照合することができる場合に一元化された。また，死者に関する情報の扱いについても，条例で個人情報に含めて規律することは許容されないとしている。

ところで，これまでの条例には，図書館の資料は適用除外とする規定が含まれていることが多かったが，今回の改廃でそれがなくなってしまった。改正個人情報保護法にも同趣旨の規定が見当たらないため，このことを懸念する声も聞かれた。

しかし，個人情報保護法第60条では，適用される地方公共団体等行政文書から除外されるものについては政令で定めるとしており，個人情報保護法施行令第16条で次のものが挙げられている。一つは，新聞，雑誌，書籍や，その他にも不特定多数への販売を目的に発行されるものである。もう一つは，図書館などにおいて歴史的・文化的な資料又は学術研究用の資料として，専用の場所で適切に保存され，一般が閲覧できる目録が作成されているなど，特別の管理がされているものである。

つまり，図書館の資料の取り扱いについては，従来どおりと考えていいだろう。しかしながら，利用者のプライバシー保護に関しては，制度の一元化によって後退しているという指摘もあり，今後の動向に注意が必要である。

（まつい　まさひで：JLA図書館の自由委員会，
長野県諏訪清陵高等学校・附属中学校図書館）

NEWS

新聞切抜帳

●全国

▶〔社会リポート〕憧れの職でも…図書館職員４分の３非正規　月収７万円ほど　女性にしわ寄せ　［日本図書館協会非正規雇用職員に関する委員会］　（赤旗8/8）

▶〔活字の海で〕メタバース図書館，検索より探索　本と出合う楽しさ再現　［ねむり木「［JP］NDC Library」，山梨県・山中湖情報創造館，東京学芸大学附属図書館「3D書架」など］　（日経9/2）

▶誰もが読書できる社会　道半ば　過去作の電子化少なく　点字・録音ボランティア頼み　「もっと読みたい」　計画策定進まず　対応業界全体で　野口武悟・専修大学教授（図書館情報学）の話　［全国視覚障害者情報提供施設協会　「サピエ」］　（朝日9/4）

▶大学図書館改革で調査　文［部］科［学］省　OA・蔵書デジタル化　24年度予算１億円計上　［デジタル・ライブラリー］　（日刊工業9/25）

▶〔解説〕学校司書　自治体で格差　小中高配置６割台　財政難で低賃金　改善必須　努力義務　後回し　厳しい雇用条件　米仏，専門職の配置充実　（読売9/28）

●北海道・東北

▶スーパー・図書館・カフェ　複合施設地域に活気　［北海道］津別［町］，小清水町が新設　相乗効果　交流人口創出　［津別町図書館］　（読売〈北海道〉9/21）

▶遊んで学んで誰でもどうぞ　交流施設「くるんと」グランドオープン　長井［市］「市内外の人，往来する場に」［図書館など］　（山形9/2，関連１紙）

▶［福島県］大熊［町］の学び舎新た　原発立地　小中一貫校で新学期　［「町立学び舎　ゆめの森」図書室などは一般町民も利用可］　（朝日8/26，関連１紙）

●関東

▶新中央図書館建設候補地　東石川第４公園「最適」　ひたちなか市　来月，正式決定へ　（茨城7/28）

▶基本計画委託費を計上　石岡市の複合文化施設　10月に入札公告　［取り下げ前の基本計画案では図書館など］　（建設通信8/31）

▶無料託児［サービス］を試験運用　［茨城］県立図書館　11月末まで毎週木曜　子育て世代読書支援　（茨城9/4，関連１紙）

▶［前橋］市立図書館複合施設に　前橋［市］中心［市］街［地］再開発　こども図書館と統合　市が基本計画案示す　（上毛8/23，関連２紙）

▶千葉県の新図書館・文書館複合施設　低層屋根付き六角形　25年度発注，開館は29年度　（建設通信8/10）

▶書店で［町田市立］図書館の本受渡し　久美堂本町田店　初の取組みが増売に　学参・児童書　売上げ20％増　本好きを呼び込み　波及効果　６月利用者約200人　（新文化7/27）

▶自筆原稿などデジタル化　東［京］大［学］に大江健三郎文庫　研究者向けに資料公開　（熊本日日9/14，関連２紙）

▶［小田急線］相模大野駅前に図書返却ポスト　相模原［市立相模大野図書館］　（神奈川7/25）

▶指定管理者制の図書館運営　本の選定は直営館　［川崎市教育委員会　幸，宮前，麻生図書館］　（東京〈川崎〉8/26）

▶〔くらし〕学校つらい子図書館おいで　館長「居場所の一つに」　机に相談カード　中川翔子さん　「不登校はさなぎの時間」　［鎌倉市中央図書館］　（産経8/28）

▶市民館・３図書館［川崎市立幸，宮前，麻生図書館］に指定管理者制度　条例改正見送り求め　川崎市議会に２団体［「社会教育を考える川崎の会」，「川崎の文化と図書館を発展させる会」］陳情書　［神奈川］県内　大和［市］・海老名市で導入　（東京〈神奈川〉9/7，関連２紙）

●甲信越・北陸

▶親しみやすい愛称付けて　魚沼市生涯学習センター　［図書館など］　（新潟日報8/17）

▶新・［佐渡市立］さわた図書館基本設計　蔵書分散は回避へ　構造の荷重問題クリア　（新潟日報9/1）

▶小千谷［市］の図書館等複合施設　愛称は「ホントカ。」　来秋開館予定　（新潟日報9/29）

▶〔日曜　特番〕アナログ空間　価値高まる　新聞と同じ，未知なる「知」へ道開く　根本彰　東［京］大［学］名誉教授（図書館情報学）　駅併設型　立ち寄りやすく　舟橋［村立図書館］　3000人の村に他市町から　小矢部［市立小矢部市民図書館］　学習励む小中高生で満席　目標上回る利用者　北陸初のオープン　国道沿いで利用増　砺波［市立砺波図書館］　［富山

NEWS

県]　(北国8/13)

▶道の駅隣接の輪島[市立]新図書館　観光・交流・憩いの場に　(北国8/31)

▶図書館再編へ提言案を提出　北杜市検討委[員会]　(山梨日日8/31, 関連1紙)

▶「世界にひとつの絵本」作ろう　松川[村]図書館と[安曇野]ちひろ美術館　[絵本]作家・はた[こうしろう]さん招きWS　[長野県]　(大糸タイムス8/8)

▶話題のアナログの遊び満喫　[箕輪]町図書館でボードゲーム　[長野県]　(みのわ8/12)

▶〔北信〕本の森へいざなうカード　長野市立[長野]図書館配布おはなし会人気　12回参加でプレゼントもリピーター増　(信濃毎日8/25)

▶筑摩書房ほぼ全てある図書館　長野[県]・塩尻市立図書館　文庫・「人間失格」初版本…　ファンや研究者も来館　創業者出身地の縁　集まった2万点　他にない「特色」　(朝日9/8夕, 関連1紙)

▶「デジとしょ[信州]」利用堅調　スタート1年　40歳代貸し出し最多　自治体蔵書充実に力　[長野県]　(読売〈長野〉9/24)

●東海

▶堀野[慎吉]さんの本を[関市立図書館]武儀分館に寄贈　[伝説]ロマンウオークの会　(中日8/29)

▶愛称決定「森のはなれ」　関市立図書館の多目的室　(中日8/29)

▶新図書館　木のぬくもり　御殿場市　完成イメージ公開　(読売〈静岡〉8/31)

▶「最後の一冊」保存場所課題　取り組み10年　[愛知]県図書館　近く満杯　[「あいちラストワン・プロジェクト」]　(読売〈愛知〉8/23)

●関西

▶坂茂[建築設計]で基本設計　旧ひこね燦ぱれす　図書館中部館整備　彦根市　(日刊建設工業8/22)

▶民家の記憶に包まれ学ぶ　京都[府]・伊根町の公共施設「伊根の杜」　内部に蔵や小路, 様式生かす　(日経流通9/20)

▶学校と市の図書を一体的に管理　授業での積極的な活用へ　豊中市　[「とよなかブックプラネット事業」]　(教育家庭9/18)

▶23万冊8年越し日の目　旧聖トマス大[学]寄贈　尼崎市が見学会　7日から　フランス革命当時の本も　(朝日〈兵庫〉9/4)

▶放置旧図書館　解体し新施設　明石市整備案　知事と市長協議へ　(読売〈兵庫〉9/15, 関連2紙)

▶〔キャンパス探訪〕関西国際大学　[三和本通]商店街に「シェア図書館」　子も親も集う交流拠点に　[三木市]　(日経〈大阪本社〉9/27夕)

▶学校図書館　新聞を活用　奈良[県]・田原本町　国の交付金で　小中学校へ配備　浮島[智子], 鰐淵[洋子]氏ら視察　自治体への周知徹底に公明[党]が尽力　(公明9/2)

●中国・四国

▶〔図書館　出会いの広場〕[鳥取]県立図書館HPでできる便利な「技」　(日本海9/19)

▶広島県教[育]委[員会]の図書館リニューアル　学校主体に転換　赤木[かん子]氏の指導に生徒や教職員から不満　本廃棄せず並べ方従前に　(中国8/1)

▶移転先取得7億円増　計72億円に　広島[市]・中央図書館　(朝日〈広島〉9/6, 関連1紙)

▶新図書館複合施設を市民会館跡地に整備　阿南市　[JR]阿南駅周辺まちづくり　基本計画素案公表　(日刊建設工業8/18, 関連1紙)

▶瀬戸内[海]巡航「船の図書館」　子供に読書機会　複数の島停泊へ　水先案内人は安藤忠雄さん　[香川県]　(産経〈大阪本社〉8/8夕)

●九州・沖縄

▶隈研吾[建築都市設計事務所]で進む　福岡[県]・築上町　図書館整備基本設計　(建設通信8/22)

▶〔虎視探探〕街に絵本箱[「えほんのたね」]　貸し出し1000冊　佐賀県伊万里市黒川町　住民中心に活動　「家読」で会話増　[「おはなしどんぐり」]　(西日本9/14)

▶上天草市新図書館　10月1日に開業へ　(熊本日日9/1)

▶[熊本]学園大[学水俣学研究センター]所蔵「水俣病資料」　広く世に　[国立]国会図書館と連携　「[国立国会図書館]サーチ」で検索可　(熊本日日9/3)

▶〔県議会〕[宮崎]県立図書館収蔵能力　31年度上限到達　県教[育]委[員会]　(宮崎日日9/20)

今月も石井一郎様, 岸本修様, 桑原芳哉様, 松野高徳様および新潟県立図書館, 県立長野図書館の皆様より記事の提供を受けました。ありがとうございました。

図書館員が執筆するということ

呑海沙織

1．はじめに

図書館員[1]は，日々，文章を書く。イベントのお知らせや報告，図書館の利用方法，読書案内，業務上の申し合わせ，打ち合わせや会議の記録，業務日誌，報告記事，論文などその内容や形態は多岐にわたる。

本稿では，複数の人の手を経て出版される実践報告や論文（以下，「論文」とする）に焦点をあて，筆者自らの（a）図書館員として「論文」を執筆した経験，（b）教員として社会人大学院生を指導した経験，（c）日本図書館協会認定司書審査会委員として審査に関わった経験をふまえ，図書館員が執筆することの意義や障壁について考えてみたい。

2．図書館員による論文の執筆

はじめに，図書館員による論文執筆の実態について確認したい。実際のところ，図書館員による論文執筆はどのような状況にあるのだろうか。

ブルサール（Broussard, Mary J. Snyder）は，論文を執筆する学術図書館員（academic librarians）は，論文を読む学術図書館員に比べてはるかに少ないとしている[2]。その理由として，組織的な支援がないこと，時間がないこと，自信がないこと，研究プロセスや専門用語に不慣れなこと，研究方法に関する知識がないこと，やる気がないことなどがあげられている[3]。ファカルティ・ステイタス（教員待遇）のしくみがある米国の学術図書館員においてすらこのような状況であることから，日本の図書館員においては推して知るべしである。

また，クレイグら（Finlay, S. Craig, Ni, Chaoqun, Tsou, Andre et al.）による調査では，図書館員が執筆する論文の割合が減少していることが明らかにされた。調査対象は，1956年から2011年の間に出版された図書館情報学領域の学術雑誌20誌の4,827論文であるが，2006年から2011年にかけて図書館員による論文数が減少していたという。

これらはいずれも海外の調査結果であるが，図書館員による論文の執筆は，活発であるとはいいがたい状況がうかがえる。

3．図書館員が執筆することの意義

次に，図書館員が「論文」を執筆することの意義について考えたい。以下，（1）図書館員のスキルアップ，（2）図書館および図書館界への寄与，（3）図書館情報学への貢献の三つの視点から述べる。

（1）図書館員のスキルアップ

クレイグらは，論文執筆は図書館員にとって重

要な継続教育活動であり，執筆のプロセスを通じて洞察力，知識，スキルを得ることができるとしている[4]。複数の人の手を経る出版という形をとる「論文」は，公表されるまでにいくつかのプロセスを経る。この各プロセスにおいて執筆者は，スキルアップをはかることができる。例えば文献調査段階では，関連文献の探索，入手，読解，整理等があるが，文献の探索，入手からは情報収集スキルの向上，文献の読解，整理からは知識・情報の獲得や思考力・分析力の向上を見込むことができる。

日本図書館協会認定司書制度では，「申請時から直近10年間の著作」を認定要件のひとつとしている。ここでいう「著作」は，「学術として高度かどうかを判断しているのではなく，図書館の経営上の重要な事柄や課題についてエビデンスに基づいて議論を組み立てて説明するという手続きをきちんと実行できているかどうかを判断」するものである[5]。「著作」を認定要件としているのは，「図書館に対する見方や考え方，さらには行動や判断が適切かつ妥当であることを周囲に理解してもらうためには，しばしば『ことば』によって，それを適切に表現することが求められ」るからである[6]。

図書館員は，「論文」を執筆することによってより多くの知識・情報を獲得し，より高いスキルを身に付けることができる。この構図は図書館員に限ったものではないが，「ことば」による記録メディアを専門とする図書館員だからこそ，「ことば」によって適切に表現することが求められるといえるだろう。執筆準備から発表に至るまで，執筆者になるという体験を通じてはじめてみえることもある。

(2) 図書館および図書館界への寄与

図書館員のスキルアップは，図書館サービスの質の向上につながる。また，執筆した「論文」は名刺代わりにもなり，自身のコミュニケーションツールとしても使える。他方，非連続的に変化する時代において，図書館員が継続的に情報を得る必要性はますます高まり，その情報源として複数のプロセスを経て精査された「論文」は最適である。実務に基づいた質の高い情報や知見を共有するという意味においても，図書館員による執筆は重要である。

さらに，塩見が「毎日やっている仕事そのものが図書館情報学の大事な出発点ですが，それを日常業務からいったん切り離して脇に置いて，対象化して見てみるというのは大事です。」[7]と述べているように，「論文」執筆は，自らの業務を客観的に振り返るきっかけになる。業務を客観視することによって，課題が明らかになり，業務の改善につなげることができる。「論文」を執筆するためには，関連資料や関連文献を調べる必要があるが，その過程で，他の事例が参考になったり，新たな気づきを得たりすることもできるだろう。

図書館員による執筆は，図書館員の社会的地位を向上させることにもつながると考えられる。その例として，あるエピソードを共有したい。1990年代半ばより大学図書館では，図書館員が組織的に情報リテラシーに関する授業に携わる試みがはじめられた[8]。筆者が所属していた大学でも，教員とともに図書館員が情報リテラシーに関する授業を担当することになった。しかし，計画段階で一部の教員から，図書館員が授業を担当することに対して強い懸念が示された。この流れを変えたのが図書館員による執筆であった。図書館員が「論文」を執筆するという事実を知った教員は「図書館員は本を貸すのが仕事で，授業なんてできないと思い込んでいた。論文を書いているのなら話は別だ。図書館員に対する認識が変わった。」と図書館員が授業に関わることを許容された。このエピソードは，図書館員による執筆が他者からの図書館員に対する評価を変えた例といえよう。

(3) 図書館情報学への貢献

図書館という現場から生まれる問題意識は，研究において重要な課題設定につながる。「『現場』を抱えているからこそ持ちうる問題意識，そうしたものは確実に存在する。そもそも研究課題の原初の形とは，こうした生きた現実である現場から生まれ出てくるもの」[9]である。

他方，“Librarian”が執筆した論文とそうでない論文とでは，論文内容に明確な違いがあるという調査結果がある。“Librarian”による論文では，図書館サービスに重点が置かれているのに対し，“Non-Librarian”（図書館員でない研究者等）による論文では，情報探索，利用，検索，情報学に重点が置かれていたという。この結果から，図書館情報学領域の論文が，実践的な図書館業務に関する課題から離れていくことが危惧されている[10]。

このように，ある意味実学である図書館情報学領域において，実務に根ざした図書館員による実践的な「論文」は，貴重かつ不可欠な存在である。

4．図書館員による「論文等」執筆の障壁

とはいえ，忙しい現場をもつ図書館員にとって，「論文」を執筆することはそうたやすいことではないだろう。前述のように，図書館員による執筆の障壁は，組織的な支援がないこと，時間がないこと，自信がないこと，研究プロセスや専門用語に不慣れなこと，研究方法に関する知識がないこと，やる気がないことなどが考えられる。このうち，「組織的な支援がないこと」「時間がないこと」について取り上げてみたい。

まず「組織的な支援がないこと」については，組織として執筆できる環境を整えることが理想的である。しかしそれ以前に，図書館員が「論文」を執筆することを推奨する，あるいは少なくとも許容する意識や空気づくりが必要である。実際のところ，「論文」を執筆したいが，上司や同僚から「そんなことは図書館員のすることではない」「そんな時間があるなら仕事をしてください」「なまいきだ」といわれるのでこわくてできないという声も少なからず聞く。図書館員による「論文」執筆は，執筆者個人にとどまらず，図書館および図書館界にとって重要であるという考え方を各図書館員が持つことが第一歩である。

次に「時間がないこと」についてである。これには絶対的に時間が足りないということもあろうが，もう少し厳密に表現すると「まとまった時間がない」ということではないだろうか。そうであれば，細切れの時間を有効活用することである程度カバーできる。ちなみに筆者が社会人大学院生であったときは，論文を執筆するための時間の多くを通勤電車の中で過ごした。1日に1時間というまとまった時間で執筆するよりも，10分の執筆を6回繰り返した方が効率的である場合もある。後者は，論文執筆から論文執筆までのインターバルが短いため，執筆時間と非執筆時間の切り替えがしやすいという利点もある。

5．図書館員による執筆

筆者が担当する筑波大学の情報学学位プログラム（博士前期課程・博士後期課程）は，その前身である図書館情報メディア研究科のキャリアアップ・プログラム（社会人を対象とする大学院のプログラム）の後継でもあることからわかるように，大学院生として一定数の現職者（図書館員）が在籍している。同学位プログラムにおいて論文指導に携わった経験から浮かび上がるのは，実務者である図書館員の経験の豊かさや見識の広さと，これらを論文として言語化するスキルのギャップである。筆者自身，社会人大学院生であったころ，書きたいことや主張したいことが頭の中にあるのに，それをどのように論文として表出すればよいのかがつかめず四苦八苦した。

認定司書の審査においても，「著作が認定に当たって最大のハードル」となっている[11]。著作が

ハードルとなっている例としては，①著作の目的や対象がはっきりしない，②文章が構造化されていない，③論理的飛躍がある，④「自分の意見」と「他者の意見」が明確に切り分けられていない，⑤論旨展開に根拠を示すことができていないなどがあげられる。

このようなハードルを乗り越えるためには，さまざまな方法がある。論文執筆の書籍を読むのもいいし，「論文」を精読するのも有効である。そしてまず，書いてみることが重要であり，執筆依頼があったら断らないという姿勢も大切である。

図書館員による執筆は，図書館員自らを変えるだけでなく，図書館や図書館界を変え，そして支える。ひとりでも多くの図書館員が執筆することを願ってやまない。

注

1）本稿では，司書や図書館職員等，図書館業務に携わる者を図書館員と称する。館種や常勤・非常勤を問わない。

2）Broussard, Mary J. Snyder. Reexamining the benefits of librarians' professional writing. College & Undergraduate Libraries, 23(4), 2016.10, 427-441

3）Kennedy, Marie R. and Brancolini, Kristine R. Academic Librarian Research: An Update to a Survey of Attitudes, Involvement, and Perceived Capabilities. College & Research Libraries, 79(6), 2018.9, 822-851

4）Finlay, S. Craig, Ni, Chaoqun, Tsou, Andre et al. Publish or Practice? An Examination of Librarians' Contributions to Research. Portal: Libraries and the Academy, 13(4), 2013.10, 403-421

5）大谷康晴．「専門性評価」制度の難しさ：日本図書館協会認定司書制度における活動を通じて．情報の科学と技術．72(6), 2022.6, 198-203

6）日本図書館協会．認定司書への道　第２回　論文の書き方（その１）－テーマの選び方－：なぜ認定司書に「論文」が必要か（日本図書館協会認定司書事業委員会）
http://www.jla.or.jp/committees/nintei/tabid/448/Default.aspx

7）日本図書館協会．認定司書への道　第１回〔座談会〕認定司書と理事長を囲んで
http://www.jla.or.jp/committees/nintei/tabid/447/Default.aspx

8）慈道佐代子．情報リテラシー教育の理論的枠組みと大学図書館における実践についての考察．大学図書館研究，75, 2005.12, 44-53

9）鈴木正紀．臨床の学としての図書館情報学．図書館情報大学附属図書館報．18(3/4)，2002.8, 4

10）Finlay, S. Craig, Ni, Chaoqun, Tsou, Andre et al. Publish or Practice? An Examination of Librarians' Contributions to Research. Portal: Libraries and the Academy, 13(4), 2013.10, 403-421

11）大谷康晴．「専門性評価」制度の難しさ：日本図書館協会認定司書制度における活動を通じて．情報の科学と技術．72(6), 2022.6, 198-203

（どんかい　さおり：筑波大学副学長・附属学校教育局教育長）

［NDC10：013.1　BSH：1. 図書館員　2. 著作］

★ 特集◉表現する図書館員－書くことのすすめ ★

現場で感じたモヤモヤを「見える化」して
── 認定司書オリジナル論文著作体験記 ──

大江ひとみ

学生時代に司書講習で先生からお聞きした「司書が働きながら著作することの大事さ」。このことは，ずっと心に残っていました。自分も将来，図書館で働くことができたら，仕事の中で見つけた課題について考え，文章にまとめられたら，と思ったものでした。

しかし，実際に図書館で働き始めてから書いたものと言えば，図書館だよりの記事や出張報告くらいでした。仕事や家事・育児など，目の前のやらなくてはならないことをこなしているうちに二十数年が過ぎていました。

そんなある日，広島市立中央図書館の土井しのぶさんとZoomで話しているときに，「論文を書いて認定司書に挑戦してみたら」とアドバイスをもらいました。そういえば，土井さんをはじめ，図書館司書専門講座を受講した同期の仲間数人が既に日本図書館協会認定司書になっていました。そんな仲間の姿を思い浮かべ，今年こそ自分も論文を書こう，と決めました。それは2021年の早春のことでした。

論文のテーマとして，すぐ頭に浮かんだのは，「地図」でした。その理由の一つには，地図のレファレンスや目録作りなどに苦心してきた経験がありました。最近では簡単にスマートフォンでGoogleマップなどを検索できますが，地図を調べる難しさは依然としてあると感じていました。そこで，この際できるだけ調べてみようと決めました。

もう一つの理由として，数年前，米国オハイオ州の図書館巡りで見たいくつかの地図室がありました。充実した地図室のコレクションやデジタルアーカイブ，そしてマップ・ライブラリアンの自信に満ちた仕事ぶりが強く印象に残り，憧れを持っていたのでした。

とは言え，「論文を書く」というイメージが，私にはうまくつかめませんでした。「画期的な新サービスや新技術」など，テーマや内容に新しい要素がないとダメなのではないか，という思い込みがあったのです。

論文を書くイメージをつかむために，「卒論の書き方」のような本を何冊か読みました。そこには，“論文は新発見が無くても書くことができる。既に発表された研究や知見をいくつも組み合わせて，自分の考えをまとめることでも論文を書くことができる”という趣旨のことが書かれていました。これを知って少し安心しました。また，論文の形式についても，モデル論文やひな形が紹介されていたので，イメージをつかむことができました。

次に，どういう視点で書くかということ，これもうまくつかめないことの一つでした。

まずは広く，地図についての資料を集めて読みました。それにより，地図の種類や特徴，最新事情など，専門的な情報を得ることはできました。しかし，それらの専門的情報と，図書館で利用者が地図を探す内容とはギャップがあるように感じました。論文の切り口をどう見つけたらよいのか困っているうちに，ひと月ほどが過ぎました。

初夏のある日，元・厚生労働省事務次官の村木厚子さんをニュースで見ました。「内閣官房孤独・孤立対策担当室政策参与」に就いた際のインタビューで，彼女はこう語っていました。

「行政と一般の人，自分はどちらの視点も持っている。両方を大切にして提案する役割を果たしたい。」

この言葉を聞いて，私はヒントをもらったような気がしました。地図資料を主体に考えがちだったけれども，それだけでは不十分なのではないか。本当に自分が課題として考えたいのは，利用者のニーズを把握し，それに応えることなのだ，と気づいたのです。そこで「図書館」・「地図」・「利用者」，それぞれの視点から掘り下げてみようと決めました。

利用者のニーズを把握したいと思ったものの，その根拠となるような調査データは見つかりませんでした。そんなとき，「レファレンス協同データベース」が頭に浮かびました。そこに登録された事例を分析すれば，図書館での地図に対するニーズの傾向がつかめるのでは，と考えたのです。そこで，2020年の1年間に登録された地図関連のレファレンス事例を分析・集計する作業を始めました。具体的には，事例を年代・地域・目的・回答資料の4項目で集計し，地図のニーズについてデータ化しました。

その結果，近い過去の年代の地元の地図を調査する事例が多いことなど，一定の傾向があることが分かりました。それだけでなく，この作業を通じて，公共図書館には地図を提供する役割が期待されているのでは，という仮説がじわじわと生まれてきました。

別の作業として，今まで現場で感じてきた地図の調べにくさについて，自分の中のモヤモヤしていたものをメモ用紙に書き出し，「見える化」する作業を行いました。「キーワードでの検索に限界がある」，「住所表記が明治時代と現在とで違う」，「利用者の地図についての誤解」など，これ以上思いつかないくらいまで，メモを何十枚も書きました。

集めた資料とデータ化したニーズ，それに手書きのメモを合わせて眺めていると，次の仮説が見えてきました。それは，「自分が感じてきた地図のレファレンスの難しさには，知識・技術不足以外に，原因が他にいくつもあるのでは」というものでした。点と点だったモヤモヤと集めた情報が次第にまとまり，いくつかの線につながっていくような気がしました。広い机で，メモをグループ化したり並べ替えたりする作業をするうちに，考えが次第にはっきりしてきました。

秋からは，一枚の紙に章ごとの構成を箇条書きでまとめる作業を始めました。章の構成が整ってきたら，全体の構成を新たに一枚の紙にまとめてみました。全体を俯瞰して見えてきたのは，「新旧の地図が持つさまざまな側面」，「利用者のさまざまなニーズ」，そして「それを結びつける図書館の役割」でした。いくつものギャップや課題に気づき，それらの解決策として自分なりの考察をしました。

納得できる流れができたところで，Wordでの入力を始めました。書いた文章を目で見て確認し，そこから本当に書きたいことを削り出していく作業を繰り返しました。統計データや専門家の著述を引用して，ぼんやりしていた自分の考えを輪郭のある形にしていくのは，パズルを組み立てていくような面白さがありました。

全体を入力した後には，意図が伝わりやすくなるよう，段落や章を入れ替えたりするなど，構成面で工夫をしました。また，家族に読んでもらい，アドバイスを聞いて専門用語を書き改めたりもしました。論文を提出したのは11月末の認定司書申請の締切日直前でした。

当初，論文は公開しないつもりで書きました。しかし，富山県図書館協会が発行する『富山県図書館研究集録』の原稿募集の案内を見て，自分も初投稿することにしました。この研究集録には，毎年，県内の図書館員たちが論考や実践報告を投稿しています。

内容を整え，「地図のニーズに応えるために」の題で，『富山県図書館研究集録』第53号に投稿しました。その結果，県内の関係者の方に読んでもらうことができました。ある図書館長からは，「地図を調べるのに，こんな大変さがあるとは全然知らなかった」という感想をお聞きしました。地味なテーマの論文でしたが，これを読んだ人が，図書館の知られていない側面を発見することがあるなら，投稿した意味はあったのかもしれない，と思いました。

「司書が働きながら著作すること」は，実際にやってみると，とても時間のかかることでした。毎日コツコツ書くのは自分には難しく，出勤日は夜に資料を読むのが精いっぱいでした。その分，休日に数時間，手を動かして考える時間を作るようにしていました。

数か月の間，一つのテーマを追いかけ，俯瞰する作業をすることで，考えや知識をじっくりと整理することができました。書いた文章は，見ていたつもりで見えていなかったことを，いくつも自分に気づかせてくれました。

（おおえ　ひとみ：富山県立図書館，
日本図書館協会認定司書第1199号）

［NDC10：013.1　BSH：1. 図書館員　2. 著作］

★ 特集◉表現する図書館員－書くことのすすめ ★

専門図書館で書くということ

―アジア経済研究所図書館の情報発信―

坂井華奈子

はじめに

アジア経済研究所図書館（以下，当館）は，アジア，中東，アフリカ，ラテンアメリカ等に関する社会科学分野の資料を収集・提供しており，蔵書は70万冊を超える[1]。開発途上国研究の資料・情報センターとして資料面から研究を支援することを目指し，広く一般に公開された専門図書館である。現地資料を重視し，海外からもさまざまな方法を駆使して収集した他館にない貴重でユニークなコレクションを求め，国内外からの利用者が訪れる。しかし，強みと弱みは表裏一体であり専門性の高い資料を使いこなす利用者は限られる。また，住民や教員・学生といった明確な利用対象を持つ公共，大学図書館とは異なり，所属研究員以外にまとまったサービス対象を身近に持たない当館のような専門図書館は，ともすると知る人ぞ知る存在となりがちである。そこで重要なのが情報発信である。資料と利用者を結びつける手助けをするには当館について絶えず発信し，類縁機関や潜在的利用者に知ってもらわねばならない。

当館のライブラリアンは担当地域を持ち，研究会への参加，文献解題などの編纂から日常業務での気づきを書き留めたコラムまで硬軟織り交ぜた執筆を業務の一環として行っている。本稿では当館のライブラリアンたちによる執筆活動を紹介する。

1．アジア経済研究所図書館の情報発信活動

当館の情報発信の歴史は創設初年度1959年の『資料月報』創刊にさかのぼる[2]。初代所長東畑精一の発刊の辞[3]によると，国内外から収集した貴重なアジア関連資料に関する情報を発信し広く知ってもらうことを意図したものであった。OPACなどなく蔵書検索には目録カードが使われていた時代のことである。新着資料の情報にとどまらず，その後もテーマを設けた各種文献目録，解題書誌，他館の所蔵情報まで含めた地域や主題による総合目録などの編纂，発信を活発に行ってきた[4]。代表的なものは所内外の専門家による「文献解題シリーズ」である[5]。インターネットの普及とともにそれらは一定の役目を終え，OPAC公開や現国立情報学研究所の総合目録への参加，新着資料のメール配信サービス，デジタルアーカイブや機関リポジトリの構築へと移行していった。

2．雑誌『アジ研ワールド・トレンド』での発信

所蔵情報の提供はウェブへ移行したが，研究所の発行する雑誌や研究会成果の単行書などへのライブラリアンによる寄稿は続いてきた。今はなき『アジ研ワールド・トレンド』[6]（1995年創刊。以下ワールド・トレンド）という和文誌ではライブラリアンが持ち回りで執筆する「レファレンスコーナー」という連載があった。テーマに沿って文献を紹介する1ページの短いもので，実際のレファレンス事例をもとにしてもよかったが，右も左もわからないまま南アジアを担当するように言われた筆者は，この執筆を通して担当地域の基礎的文献について学ぶことにした。その後「ライブラリ・コーナー」とタイトルを変え，扱う内容も幅広くなり2018年の休刊まで続いた。連載以外にも，ワールド・トレンドでは研究員が本業の研究成果の執筆に追われる時期（3月号～5月号）に図書館が特集企画を組むのが恒例であった。テーマは図書館内の特集号の企画チームで検討し，記事の執筆や内外の執筆者への依頼等も行った。地域別コレクション紹介，地域研究のコア・ジャーナルなどのオーソドックスなものから，オープン・ガバメント・データ，地域・国に特化した途上国の引用文献データベースなど当時としては先進的なテーマ，また，災害と図書館，図書館と障がい者サービス，アジアの古本屋など幅広い内容を取り上げてきた。2005年6月号より機関リポジトリで

公開されておりウェブでも読めるため，購読していなくとも目にした方もいるかもしれない。しかし研究成果の発表形態再編の影響で2018年３月・４月合併号をもって惜しまれながら休刊した。

３．コロナ禍でのオンラインの試み－ライブラリアン・コラム

ワールド・トレンド休刊後，ライブラリアンが定期的に発表する場がなくなってしまった。2020年，コロナ禍で来館を積極的に促せないなか，例年実施していた資料展示も中止となった。そこで利用者に情報を届ける試みとして「ウェブ資料展：途上国と感染症」[7]と題し，ウェブにテーマに沿った蔵書を紹介するコラムを連載形式で掲載することとした。これをきっかけにライブラリアンが執筆することの重要性が館内で再認識され，感染症対策のための来館制限を撤廃した現在もコラムは続いている。テーマを設けた特集としては，2021年10月から2022年11月まで，「途上国・新興国の2020年人口センサス」についての連載が行われた。人口センサスは日本の国勢調査にあたる統計調査で，統計資料の利用が多い当館ならではの企画であった。通常記事は図書館やライブラリアンの活動に関するものであればテーマは執筆者に一任されている。お宝コレクションやデジタルアーカイブの紹介など資料の内容に関する広報的なものをはじめとしつつ，現地資料収集を行う当館ならではの各国書店事情を紹介したものが目につく。筆者もインドでの資料収集活動についてのコラムを書いた。地域に関するものばかりではなく，カビ対策やマイクロフィルムの保存など他館とも共通しそうなトピックを含め，コマンドプロンプトやChatGPTに関するもの，請求記号の裏事情や資料の来歴をひもとくものなど内容は多岐にわたる。興味を持たれたらぜひ「ライブラリアン・コラム」をのぞいてみてほしい。

おわりに

実をいうと執筆は得意ではない。依頼を受けたときには悩んだが，過去に発表した文章を数えると年間１，２本のペースで何かしら書いている。図書館系の媒体からの依頼もあるが，所内の連載や研究会に参加した成果，海外派遣中の現地レポート，資料展示企画をもとにした文献紹介など，ほぼ業務の過程で執筆したものであった。そこで本稿では同様の立場でより優れた文章を生み出している先輩や同僚たちの執筆活動を紹介することとした。

当館ならではの発信をする一方で，人の入れ替わりも少ない専門図書館では館内で得られる知識には限りがある。コロナ禍以降，研修や講演会など他館の人と触れ合う機会はオンラインが増え，集合型のときは参加者と気軽に情報交換ができたがそれも難しくなった。そのため他館の経験が書かれた文章はおおいに参考になる。今年の猛暑で書庫環境の温湿度管理に悩んだ際には日図協発行の文献や他館のウェブを参照させていただいた。

締切に追われているときは胃が痛いが，執筆の過程で学ぶことも多く，考えが整理されたり，成果が思いがけずその後の業務に役立ったりするものである。

仕事柄，レファレンスなどで「こんな資料があったとは！」と先人に感謝する体験をした方も多いだろう。あなたが書き記した文章がどこかで同じように利用されるかもしれない。ウェブでも手軽に情報が発信できる時代になった。ぜひ，まだ見ぬ読者のために積極的に執筆していただきたい。

参考文献

1）『アジア経済研究所図書館について』（アジア経済研究所図書館ウェブサイト）
https://www.ide.go.jp/Japanese/Library/About.html

2）アジア経済研究所『アジア経済研究所60周年記念誌』（日本貿易振興機構（ジェトロ）アジア経済研究所，2021.7）p.42-43. TOPIC 03「蓄積から発信へ－図書館60年の歩み－」
https://www.ide.go.jp/library/Japanese/Info/Memorial60/pdf/Memorial60.pdf

3）アジア経済研究所『アジア経済研究所30年の歩み』（アジア経済研究所，1990.12）p.S15.
https://www.ide.go.jp/library/Japanese/Info/Memorial50/Ayumi/pdf/30_26document.pdf

4）高橋宗生「アジア経済研究所発行地域・国別文献目録・解題リスト」アジ研ワールド・トレンド　2008年３月号.（特集途上国研究のための研究ツール－新・旧書誌情報を活用する）p.39-42.
https://doi.org/10.20561/00046982

5）文献解題・目録類－アジア経済研究所
https://www.ide.go.jp/Japanese/Publish/Books/Biblio.html

6）アジ研ワールド・トレンド－アジア経済研究所
https://www.ide.go.jp/Japanese/Publish/Periodicals/W_trend

7）https://www.ide.go.jp/Japanese/Library/Column/Special/Infection.html

（さかい　かなこ：アジア経済研究所図書館）

［NDC10：013.1　BSH：1. 図書館員　2. 著作］

★ 特集◉表現する図書館員－書くことのすすめ ★

医学図書館員として、興味を持って進めてきたこと

城山泰彦

1．医学図書館員として

学校法人の図書館に，技師さんなどと同じ職種である「技術職（司書）」として職を得た。医学部の学生をはじめとする学習の場としての大学図書館とともに（後に他学部を開設），医師であり研究者，看護師やコメディカル職員等，教育・研究・診療に関わる医療従事者等を利用対象とする専門分野を扱う図書館でもある。

医学図書館において，当時の代行検索による文献検索や文献複写依頼をはじめ，早くて正確な利用者対応を求められることが常であった。就職活動の際に訪問した別の医学図書館で，「依頼された検索や複写文献の向こう側には，医師や患者さんがいることを常に意識するように」と教えていただき，医学という専門性に魅力を感じた。着任当初はその専門性に圧倒され，不安を抱きながら勤務していた。医学図書館司書に特有と思われるぱりっと糊がきいた白衣を着用して，てきぱきと利用者対応をされる先輩司書の姿，そして医学部の講義を担当される先輩司書の姿に，専門職としての目指すべき姿をみた気がした。まだ電子媒体はなくほとんどが冊子の資料で，今よりも利用対象者と司書のお互いの顔が見えていた時代である。新人司書にもかかわらず，なかには丁寧かつ親身に接してくださる先生がいらっしゃり，業務や専門知識を早く覚えて少しでも期待にお応えしたいと思った。

順天堂大学学術メディアセンターが加盟するNPO法人日本医学図書館協会（以下，JMLA）は，「定款」の「事業」で，図書館に関する調査・研究，機関誌の発行，教育普及などを定めている。具体的には，医学図書館員に必要なスキルを養成する研修と，研究発表の場[1]や機関誌への投稿[2]という機会を用意している。先人が設けて多くの方の尽力をいただき，形を変えて引き継がれてきた。1974年から1993年まで実施されていた“日本医学図書館協会セミナー”では，合宿形式の研修機会の後に論文執筆が求められていたと聞く。経験が浅い医学図書館員を対象とした研修機会で，受講後に業務の合間や自身の時間を使い，時には先輩司書から教わり論文をまとめあげたと思われる。当時の『医学図書館員セミナー論文集』の目次を眺めると，独創的な研究が多く興味深い。

医学図書館においては，そのような経験をされた先輩方の影響が残るためか，私たち後の世代にとっても，本特集のテーマ“表現する図書館員－書くことのすすめ”は，過度に意識することなく，無意識のうちに学んでいける環境に身を置けていた。親身に接してくださる学内外の先輩方の存在もあり，JMLA研修機会のほかにも，「医学情報サービス研究大会」や「生物医学図書館員研究会」，そして自主的な勉強会に参加させていただいた。難しいと感じることもあったが，楽しみを見いだしながら学ばせていただける機会であった。

2．発表の機会

社会人として初めての研究会参加は，勤務2年目で，偶然にも所属機関を会場にして開催された研究大会であった。大会協力委員と口演発表者として，職場の先輩が薦めてくださったテーマを共同発表させていただいた。基本的な構成を整えていただき，学部卒業研究以来となる取り組みに試行錯誤した。大会当日は，協力委員としてのスライド担当の緊迫した役割と，多くの参加者を前にした発表の緊張が重なり，楽しむ間もなく疲弊した。しかし発表と質疑を終えた後に感想やご指摘・ご助言をいただけたことと，つたない発表を聞いてくださったことへの感謝もあり，少し後になってから…，心地よい達成感を得られた。

与えられたテーマはこの一回で，以降のテーマは興味を持ったことや疑問に感じることを対象に，データを用いた計量的な分析を継続してきた。時

折，何のために発表準備をしているのか迷うが，問題意識を発表という形にまとめあげるように意識している。そして目標として具体的な発表機会を定めて，開催日や演題のエントリー期限等から逆算して，余裕をもって準備を進めていく。口演発表とするかポスター発表とするかは，それぞれによさがあるため，演題内容から対応しやすい形式を選択している。

3．投稿の機会

初めての投稿は，編集委員会からいただいた，先の発表演題の投稿依頼であった。演題発表は投げかける機会で，質疑等でご指摘をいただいた点を加味して，成果物として文献にまとめる。発表演題はできるだけ原稿としてまとめるべきで，考えただけでまとめられていない研究は，他人からみれば何も考えていないのと一緒であると思う。アウトプットの機会は，他の方から教えていただく機会を自ら作り出していく過程でもある。文章にまとめにくい内容の演題もあるが，足りない点や補足となる追跡調査を行うなどしてまとめていく。

投稿にあたっては，執筆規程や論文構成を守るなどのルールを順守すべきである。ただし誰にでも不慣れな時期はあるので，完璧さを求めるあまりに過度に失敗を恐れなくてもよいと感じる。できれば投稿前に身近な方に読んでいただき，自分では気づけない点をご指摘いただけるとよい。難しい場合は，一定期間原稿を放置した後に再読すると，整っていない表現や無意識に覚えてしまっている言い回しに気づかされる。

私の身近な存在である『医学図書館』誌への投稿は，編集委員や査読委員の方々が，投稿原稿をよりよくするために具体的な修正の提案を提示くださる。学位審査や学会発表のような厳しい指摘はほぼなく，大げさに言えば，一緒に原稿をまとめあげていく過程を伴走してくださる。本稿の『図書館雑誌』編集委員を含め，編集に携わってくださるみなさまの多大なるお力添えに，心より感謝している。

4．おわりに

図書館の現場において，業務の価値観や重要度は，時を経て常に変化している。担当している業務のなかでも，工夫されている先進的な取り組みや，新たな事象の把握など，研究テーマとなりうる種はいろいろなところに転がっている。

調査研究は自発的に進めることが大切と思うが，自発的な行動は，無意識のうちに苦手分野を遠ざけがちとなる。時には義務感を持って対応しなければいけない場に身をおくことが，得難い学びの機会となる。職場における業務をはじめ，JMLA等の委員会活動に参加して機関誌や研修機会を作り上げること，研究会や勉強会で企画・運営・参加すること，そして社会人大学院生として学ぶことなどである。決められたスケジュールのなかで，他の方に理解いただけるように自らの考えを伝えること，逆に他の方の考えを理解するように努めることが求められる。なかでも大学院への進学は，研究者である教員やともに学ぶ大学院生からご教示をいただける機会であり，関連文献等を調べて精読する機会であり，そのうえで論文という成果物の発表が求められる。費用と時間がかかるとてもハードルが高い選択肢ではあるが，現役図書館員ならではの視点や問題意識と研究という方法論が交わることで，視野と考え方が広がる機会となる。

調査研究は，専門職に必要な自己研鑽のひとつであると思う。興味を持って可能な範囲で続けてきた発表や投稿であるが，反響をいただくことや，他の文献からの引用を確認できると嬉しいものである。自らの研究テーマを振り返ると，ふとした問題意識の確認からはじまり，次第に業務に関連する調査・分析が多くなっている。

いまは置かれている立場から，後進の学びを積極的に応援していくとともに，これからも自らの歩みを少しずつ進めていきたいと考えている。

参考文献

1）日本医学図書館協会．JMLAコア研修・学術集会・CEコース等．［internet］．https://jmla1927.org/core.php［accessed 2023-09-14］
2）日本医学図書館協会．機関誌「医学図書館」．［internet］．https://jmla1927.org/bulletin.php［accessed 2023-09-14］
3）城山泰彦．広場／図書館員の学び　図書館員として，身近なところから探してみよう．医学図書館．2013；60(2)：110-111.
4）城山泰彦．特集／特集：私の研究の進め方：テーマ決めから発表まで～私はこうしている～　はじめての研究，そして発表．医学図書館．2019；66(2)：81-83.

（きやま　やすひこ：
順天堂大学本郷・お茶の水キャンパス学術メディアセンター）

［NDC10：013.1　BSH：1. 図書館員　2. 著作］

★ 特集◉表現する図書館員－書くことのすすめ ★

「小さな気付き」を書いて残すこと

伊藤民雄

私が，図書館情報学の学び直しのために進学した社会人大学院を修了したのは2018年３月のことである。出版から図書館の選書まで扱う「図書館と出版流通」というテーマに取り組んだが，あれから丸５年が過ぎたことになる。その間，単著は改訂も含めれば３冊，関わった共著・部分執筆は５冊，学外者とのコミュニティ再構築を目的に始めた学会活動においても研究発表，ワークショップやポスター発表も行うようになった。結果としては書いたことにはなるのだが，何回も推敲したのに，自分の文章にミスを見つけて凹むのは相変わらずで，文章力が上達したとか，論理的に文章が書けるようになったとかは口が裂けても言えない。唯一変わってきたのは，普段の業務や文献精読から得た「小さな気付き」を，書くことによって，何らかの成果として残せるようになったことだろうか。大学院時代も含め，自分にとって主な出来事を振り返ってみたい。

１．『出版ニュース』誌への寄稿

大学院在籍１年目（2016年）に，以前から強い関心を持っていた地方・小出版流通センターの文献を集中的に追っていた時期がある。同センターの設立は，1975年から行われた「埋もれた良書の掘り起こし運動」による地方出版物展示即売会が契機となっていた。気付いたのは，これまでは必ずあった周年記念や回顧記事が，開設40年時（2016年２月）には全く見られなかったことである。面識のあった出版ニュース社の清田義昭社長（当時）にその疑問を伝えると，どういうわけか私が回顧記事を書くことになり，数日後には，同センターの川上賢一代表取締役にインタビューを行う機会に恵まれた。果たして『出版ニュース』誌の2017年３月中旬号に「数字で見る地方・小出版流通センターと公立図書館」という記事で掲載された。今でも，川上氏から投げかけられた「図書館で継承すべきことは何か」の問いかけが強く残っている。

２．全国公共図書館協議会の全国調査に関わる

修了後すぐに，指導教官の推薦で，全国公共図書館協議会の2018～2019年度の全国調査である「公立図書館における蔵書構成・管理に関する実態調査」の助言者に就任することになった。文献調査により，公共図書館界では共通の選書理論の議論が活発であるにも関わらず，蔵書構成・管理について，全国的な悉皆調査がこれまでかつて一度も行われていないことに気付いた。今後の議論や取り組みの基礎を作ることを目的に，資料選択だけではなく，蔵書評価，除籍，保存の各プロセスに関する設問を配した質問用紙を作成し，全国の公立図書館に配付した。特に保存の設問については，自治体共同保存を意識し，北米の共同保存書庫（シェアードプリント）を参考にした設問を加えた。

この調査データを利用して，市区町村立図書館の収集方針の年代別の全国的・地理的な普及拡大について学会発表を行った。GISを使い収集方針の策定時期を年代別，自治体別で図示したのが図１である。この「見える化」は99.5％という驚異的な回答率で可能となった。

３．全国短期大学紀要論文索引の電子化利用許諾

当館に専用室まである（全国の）短期大学発行の紀要がもっと利用されるためには？　そんな問いかけにより，2019～2020年度にかけて私立大学図書館協会から研究助成を受けた。結論として利用

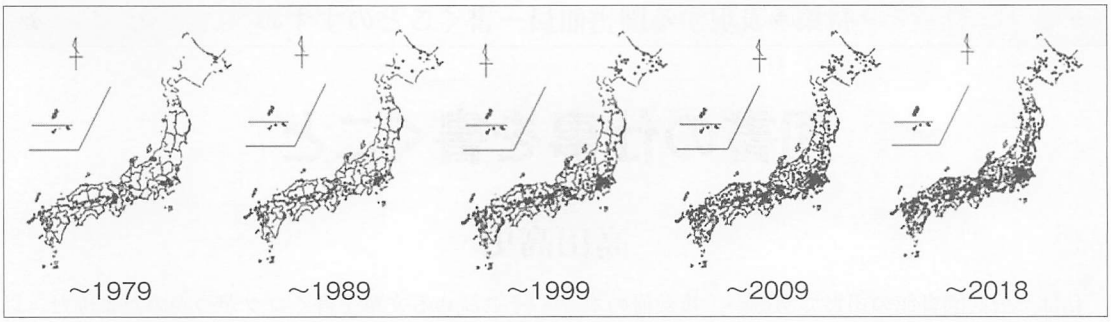


図1．1970年代以降の市区町村自治体における収集方針の普及拡大の分布状況

促進のために，既存の書誌『全国短期大学紀要論文索引』（図書館科学会，1981-2006），全26巻をデータベース化することになったが，その利用許諾取得の話をしたい。2000年前後に活動停止となった図書館科学会関係者から如何に利用許諾を取るのか。勤務先の顧問弁護士に相談し，編集著作物として処理し，関係者から承認を得ることとした。まず同会の編集代表者に該当する林収正会長ご本人とご家族には残念ながら連絡が付かなかったため，続いて13人の編集委員（＝方針決定者）のうち連絡先が判明した４人の委員の方に，「データベース化趣意書」を送付し快諾を得ることができた。皆口をそろえて「林先生の業績が継承される」と喜んでくれた。その後，発行出版社に承諾状況を伝えたところ，版面権を主張しない，という承諾を取ることもでき，データベース化にこぎ着けた。小さな気付きから，当時の関係者の強い思いを知ることができた貴重な機会だった。

4．「図書館情報学文献目録」の復活と「書誌の書誌」執筆

日本図書館情報学会運営のデータベース「図書館情報学文献目録」は2015年頃から停止していた。大学院時代に全く使えない状況だったのを残念に思い，同学会にデータ利用許諾を願い出た。そのことを知人に話したところ，他の冊子体書誌をデータ化して追加して強化してはどうかとの助言を得た。調べて見ると，明治期から数多くの図書館情報学文献の目録，索引，抄録が作成されており，これらを利用しない手はないと思った。ここから20近くの個人・団体にお手紙を書き，利用許諾を取り付け構築したのが「図書館情報学文献目録：BIBLIS PLUS」である。これらのデータ化に加えて，戦前・戦後の主要誌の総目次・総索引のデータも投入し，創刊号からしっかりと検索できるようにした（もちろん全誌を入れているわけではない）。

データベース化の一方で，忘れ去られるには惜しいこれらの書誌の継承・活用を考えるようになった。複数の書誌にはその継続性・関係性が見られ，文章化してみると意外に面白いのではないかと思った。調べて見ると，国立国会図書館編『図書館学・情報科学文献の検索および特殊資料の利用』（1983）から，図書館情報学分野の「書誌の書誌」は40年間発行されていない。2023年６月に上梓したのが，『探すツール：図書館，出版，メディア書誌の書誌』（日本図書館協会）である。これについては別に書く機会があると思う。

5．最後に

こうしてみると，大学院時代が，自分の書くことの意識の転換期になったのは間違いない。私の場合には，小さな「気付き」を，幸運にも形として残すことができた。そしてその一方で，先人達が遺した貴重な財産の継承を考える機会も得た。

図書館あるいは図書館情報学の世界では，誰もが同じものを見ながら，何故か見過ごされる，見逃される，あるいは見落とされる，ものが多々ある。そうした機会は数多く訪れるので，気が付いた方は是非書くことに挑戦していただきたい。

（いとう　たみお：実践女子大学図書館）

［NDC10：013.1　BSH：1. 図書館員　2. 著作］

★ 特集◉表現する図書館員－書くことのすすめ ★

司書の仕事を書くこと

高田高史

私は，公共図書館の司書であるが，複数冊の本を執筆し，各種の雑誌等にもしばしば文章を書いている。どうして，そういう状況になったのか，自分の中では因果関係が整理できているが，他人から見ると不思議なことかもしれない。簡単ではあるが本稿を通して，司書が仕事を書くことについて，自分の経験や感じたことをまとめておく。

1．1冊目の著作まで

私は1996年より神奈川県の司書として働き始めた。ほどなく当時の大先輩から誘われ，かながわレファレンス探検隊という勉強会に参加することになった。川崎での仕事帰りに「ビールを飲もう」と言われて，厚木まで連れていかれた記憶がある。

職場外の司書との交流も楽しかったので，何回か参加していたら，事務局を引き受けることになった。この勉強会では，年に1冊，活動の報告書（レファレンスの事例集）を手作りの冊子にまとめていた。そのころは，まだ文章を好んで書いていたわけではない。何年か報告書を出していたら，それが柏書房の目に留まり，同社より本の出版をさせてもらえることとなった。結果，勉強会の有志8名で本を執筆することとなった[1]。

最初の原稿を提出し，初稿ゲラが戻ってきた。見ると，共著者の文章はおおむねしっかりと読めるレベルであったが，私の執筆部分は読むに耐えられるレベルではなかった。文章が下手だったのだ。私の執筆箇所のゲラには，うんざりしているであろう校正者の赤字がびっしりと書き込まれていた。「俺の文章は句点が多すぎるのか…」など，一つひとつ指摘を咀嚼し，抜本的に直していった。また共著者に比べるとすらすらと読めない文章だったので，音読をして読みやすい文章に改めていった。この2点を実施したことが契機で，そこそこ読める文章を書くコツがつかめたようだ。以後，文章力はそれなりに向上した。

余談になるが，書くより話すのはもっと苦手であった。講師を頼まれることもあったが，苦手だという自覚があるから，ちゃんと対策をたてていた。例えば，たまたま松山市に滞在していた時には，道後公園の奥のほうでノートを見ながら話す練習をしていた思い出がある。もっとも今は話すのに慣れたので，そうしたことはしていない。

2．仕事をまとめる

1冊目の本が好評であったこともあり，レファレンスをテーマとした数冊の本を執筆した。本を扱う司書として，本がどのようにできるのか，身をもって経験できたのは，自分の財産となった。

ただしこれらの本は，架空の図書館を舞台にしたレファレンスの事例集や，わかりやすく図書館での調べものを説明したものであり，自分の勤務先での仕事を記したものではなかった。

実際の仕事について積極的に書くようになったのは，勤務先の神奈川県立川崎図書館で社史コレクションを担当するようになってからである。展示「社史にみる企業キャラクター」の開催，社史の情報紙『社楽』の刊行，社史編纂をサポートする「社史ができるまで講演会」の開催，日本初の「社史フェア」の開催……，などを立ち上げてきた数年間の取り組みはどのように行われていたのか。私の記憶も年月とともに定かではなくなるし，人事異動等で他の職場に移ればわからなくなるであろう。全国的にも斬新な取り組みであったため，きちんと記録をしておきたいと思った。

レファレンスの本を書いていたからか，幸運にも社史の本を柏書房から刊行することができた[2]。単に仕事の記録を書き留めたわけではない。同書

の前書き部分から抜粋すると「この本は，図書館や社史という直接的な事柄だけではなく，あまり光があたらなかった資源の活用法という読み方もできるでしょう。多額の費用が必要なプロジェクトではありません。工夫とアイデアと，多くの協力を得て進めてきた等身大の実践例です。」と記している。本に書いたことはあくまで事例であって，同業者あるいは異業種の方が読んでも，仕事や課題のヒントが見つかるように心がけて記した。その意図をくみ取っていただけたからか，いくつかの新聞の書評欄でも取り上げていただくなど，広い読者に興味を持ってもらえたようだ。

一方，同僚に対しては，自分が社史の担当を離れた際の引継書にもなるかもと思ってはいたが，同僚が読んでいる姿はほとんど見かけていない。

当たり前であるが，職場のことを書く場合，あまり脚色すると同僚に怒られるので，表現の仕方はさておき事実しか書いていない。一方，職場や関係者に配慮をして，書ければ面白いけれど書けない事柄は多々あった。執筆する媒体や内容によって，職場の許可が必要であることはいうまでもない。この点，所属や組織によって対応の温度差はあるようだ。

3．書くことの利点

社史の担当をしていた同時期，私は展示にも力を入れていた。ちょうど『神奈川県立図書館紀要』で執筆者を募集していたので展示の事例報告を書かせていただいた[3)]。

字数の制限もなかったので，一つのイベントの顛末を，同業者等の参考になるように詳しく記した。私が持っている図書館での展示のノウハウが詰まっている。神奈川県立図書館のホームページでも公開しているので，ご覧いただきたい[3)]。

また，自分が苦労をしたものとして，職員研修「専門家に資料を学ぶ」がある。こちらは執筆というわけではないが，図書館振興財団に取材に来ていただき，機関誌の記事として残すことができた[4)]。この職員研修について問い合わせなどがあれば，記事を示せば経緯を説明できる。

社史を担当していた私は，企業の社史編纂関係者と話す機会が多い。社史刊行のメリットとして，会社の歴史に関する問い合わせへの回答がとても便利になったという声は何度か聞いた。この感覚に近いかもしれない。

もちろん，内部資料としてきちんと書類をそろえておけば記録（アーカイブス）の役割は果たせる。ただ，刊行物に残すことによって，司書の仕事の周知につながることはもちろん，対外的にも認知された証左となる。

文章を書くのに慣れると，さまざまな利点がある。例えば，本の紹介文（新刊情報にあるような4，5行の紹介文）をささっと書けるというのは司書として持っておきたい能力であるが，私はとくに苦も無くこなすことができる。本を手に取る→ぱらぱらめくる→要点をみつける→読みやすく書く，という流れを身に着ければよいのだが，そうした力は各種の文章を書きながら身に着けたものだと思う。

ここ数年は『図書館雑誌』の「図書館員のおすすめ本」から，しばしば執筆依頼をいただくが，こちらも楽しく書かせていただいている。

本稿を読んで，もし「仕事を書く司書」になりたいと感じたなら，少なくとも私という先例はあるので，たどり着ける道は必ず存在する。

とはいえ，他と違うことをしているから書く機会を与えられるという側面もある。人と違うことをする（違うことしかできない）というのは，なかなか大変でもあるのだ。

注

1）浅野高史＋かながわレファレンス探検隊『図書館のプロが教える〈調べるコツ〉』柏書房．2006.9
※浅野は旧姓

2）高田高史『社史の図書館と司書の物語　神奈川県立川崎図書館社史室の5年史』柏書房．2017.2

3）高田高史「川崎市夢見ヶ崎動物公園とのコラボ催事－神奈川県立川崎図書館ミニ展示の記録－」神奈川県立図書館紀要，第14号　2020.2　p.41-59
※https://www.klnet.pref.kanagawa.jp/publications/kiyou/にて公開（2023.9確認）

4）「幅広い科学技術系の蔵書誇る 理系専門の図書館での司書勉強会」図書館の学校，2014年冬号　2014.12　p.48

（たかだ　たかし：神奈川県立川崎図書館）

［NDC10：013.1　BSH：1. 図書館員　2. 著作］

★ ★

霞が関だより

▶第240回 ◉文部科学省

令和５年度新任図書館長研修

文部科学省では，毎年，新任の図書館長を対象とした図書館の管理・運営・サービスに関する専門知識等について研修を行い館長の資質向上を図っています。

研修日程表

［配信会場：国立大学法人筑波大学　筑波キャンパス春日エリア］

時刻	９月20日（水）	９月21日（木）	９月22日（金）	時刻
9:30				9:30
9:45	開講式（15分）			
10:00	オリエンテーション（15分） 【講義①】（40分） 図書館行政の動向 （毛利）	【講義⑥】（70分） 図書館と情報技術 （高久）	【特別講義②】（70分） 北ヨーロッパにおける 公共図書館の意義と役割 （吉田）	
10:40	休憩（15分）	休憩（15分）	休憩（15分）	10:40
10:55	【講義②】（70分） 図書館の組織経営と チームマネジメント （豊田）	【講義⑦】（70分） 電子書籍の動向と図書館サービス （植村）	【講義⑧】（70分） 図書館における多文化 サービスと社会的包摂 （米田）	10:55
12:05	昼休み（65分）	昼休み（65分）	昼休み（65分）	12:05
13:10	【講義③】（70分） 図書館の経営戦略と イノベーション （小泉）	【実践報告①】（35分） ランサムウェア攻撃とその対応について　～那覇市立図書館の事例～ （島袋）	【実践報告②】（35分） 地域図書館におけるソーシャル・インクルージョンの試み　～みんなのがん教室の取り組み～（藤坂）	13:10
		休憩（10分）	休憩（10分）	13:45 13:55
14:20	休憩（15分）	【特別講義①】（70分） 国立国会図書館のデジタル化と 図書館送信サービス （渡邉）	【実践報告③】（35分） 図書館におけるSNSの活用 （仲尾）	14:30
14:35	【講義④】（70分） 図書館の危機管理 （千）		休憩（10分） 【講義⑨】（60分） 著作権法の概要と動向 （井上）	14:40 15:05 15:20
		休憩（15分）		
15:45	休憩（15分）	【パネルディスカッション①】 （110分） 図書館経営と館長の職務 （田村） （小林） （一ノ瀬） （池内）	休憩（10分）	15:40 15:50
16:00	【講義⑤】（70分） 図書館における障害者サービス （佐藤）		【講義⑩】（60分） 図書館サービスと著作権 （井上） 閉講式（15分）	16:50
17:10				17:05

以下，実施機関である国立大学法人筑波大学から，「令和５年度新任図書館長研修」についてご報告いたします。

令和５年度新任図書館長研修を終えて

新任図書館長研修は，新任の公共図書館長及びそれに準ずる業務を行っている職員を対象とした研修で，文部科学省及び筑波大学が主催，日本図書館協会の共催により実施しています。

今年度も録画配信を取り入れたオンライン形式で実施しました。

本研修は，３日間の日程で，講義（12科目13時間10分），及びパネルディスカッション（１回），実践報告（３回）から構成されています。日本の公共図書館に関する最新の基礎知識と図書館長に必要な知識，情報を提供しています。図書館長研修というと，難しい印象がありますが，講義は，入門的な分かりやすい内容から始まり，専門的な内容へ展開されていきます。なお，実践報告の一つとして，ランサムウェア攻撃とその対応について，図書館におけるネットワークサービスの重要性が高まる中でのインシデントとその対応策や復旧プロセスについてご報告をいただきました。また，文部科学省の図書館行政の動向の講義では，最新の話題が取り上げられています。

近年は，図書館の関わる領域が広がり，危機管理等の専門家にも講師をしていただいています。また，パネルディスカッションでは各地の図書館活動をリードする３人の図書館長に講師をしていただき，実践事例の紹介に努めています。

受講者からの質問はメールやWebフォームで受け付け，後日，講師に回答していただき，大学のWebサイトで情報を共有しています。図書館の現場で起きる具体的な課題に関して，多岐にわたる質問が寄せられています。

今年度は，207名が受講されました。図書館長の考え方は図書館運営に対して大きな影響を及ぼすため，新任図書館長研修は，日本の公共図書館で最も重要な研修の一つであると言えます。また，図書館長にとっては，職員と対話し，仕事について提案するための拠り所となっているようです。受講者からは，図書館長だけでなく，他の管理職や一般職員にもこの研修を受講させたいという意見もあがっています。

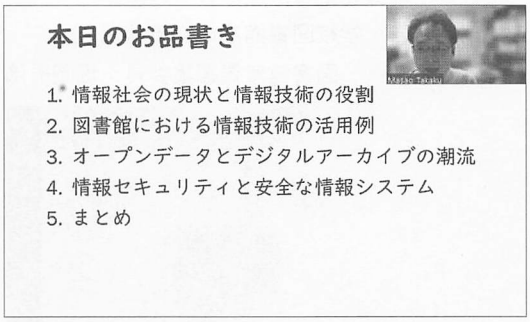
これまでの新任図書館長研修を振り返って

新任図書館長研修は，平成５（1993）年度に始まりました。平成10（1998）年度からエル・ネット（衛星通信），次いでインターネットで全国の副会場に配信されており，いわゆる遠隔研修として，26年目を迎え，全国の新任の図書館長の受講が可能となりました。

アンケートでは，99％がこの研修の内容について，「図書館の仕事に役立つ」，「受講してよかった」と評価しており，大変満足度が高く，自館の将来像の形成にも役に立っているという声があります。研修終了後に提出されるレポートからも，受講者が図書館の改革に積極的に取り組もうとしている様子がうかがえます。また，研修を通じて，図書館政策に関する情報と図書館改革の考え方が全国に普及しています。本研修で講師を務めた講師や図書館長は，しばしば他の研修にも講師として招かれているようです。

本研修の講義要綱には，公共図書館の基礎知識と実践事例を掲載しており，研修終了後も手引きとして利用できると考えています。図書館長をはじめ，より多くの図書館職員に日常的に参照していただくなど，今後は，そのコンテンツがさらに広く活用されることを期待しています。

〈研修に関すること〉
文部科学省総合教育政策局地域学習推進課社会教育人材研修係
☎03-5253-4111（内線3676）
〈研修の実施，運営に関すること〉
国立大学法人筑波大学図書館情報エリア支援室
☎029-859-1051



▲図書館と情報技術の講義
筑波大学高久准教授

▲パネルディスカッション：図書館経営と館長の職務
モデレーターの筑波大学池内准教授

［NDC10：010.7　BSH：研修（図書館員）］

★ 日本図書館協会学校図書館部会第51回夏季研究集会東京大会 ★

学校図書館の役割を問い直す

高橋恵美子

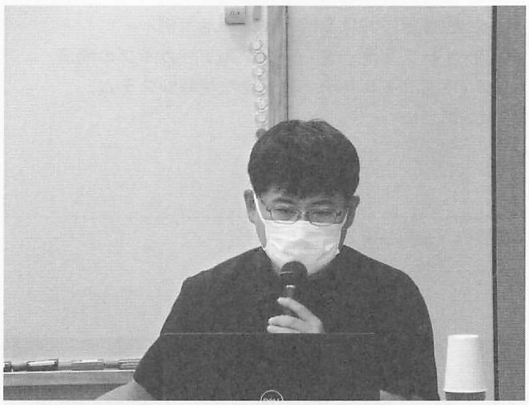
7月28日，29日，日本図書館協会学校図書館部会夏季研究集会が，開催された。参加形式は会場参加（日本図書館協会2階研修室）とオンライン参加の併用である。参加者は94名（スタッフ含む），うちオンライン参加68名，会場参加26名。集会テーマは「学校図書館の役割を問い直す」である。

＊

1日目，部会報告と講演が行われた。

1．部会報告　学校図書館をめぐる状況

図書館年鑑編集委員　堀岡秀清



部会報告は，教育施策に関すること，学校図書館関連の動き，その他の流れで行われた。

教育施策に関することでは，学校教育情報化推進計画（2022年12月策定）に2か所学校図書館に関する記述があったこと，第4期教育振興基本計画（2023年6月閣議決定）の中の学校図書館に関する記述が紹介された。またデジタル教科書をめぐる動向に加えて，「教育のICT化に向けた環境整備5か年計画（2018～2022年度）」が2年間延長となったことが報告された。

学校図書館関連の動きでは，第6次学校図書館図書整備等5か年計画（2022～2026年度）（2022年1月策定），第五次「子どもの読書活動の推進に関する基本的な計画」（2023年3月閣議決定），「新しい時代の学びを実現する学校施設の在り方について」（2022年3月公表）などについて，日図協の対応も含め，取り上げられた。また今年は学校図書館法公布70周年であることから開催された各種集会のアピールや要望書において，学校司書の配置の改善がとりあげられていることが紹介された。

その他では，生成AIについての問題点の指摘，文部科学省の対応の報告等があった。

この部会報告に対し，部会幹事高橋恵美子より，非正規雇用職員に関する委員会の学校図書館職員調査等3点についての補足発言があった。

【参加者アンケートより】

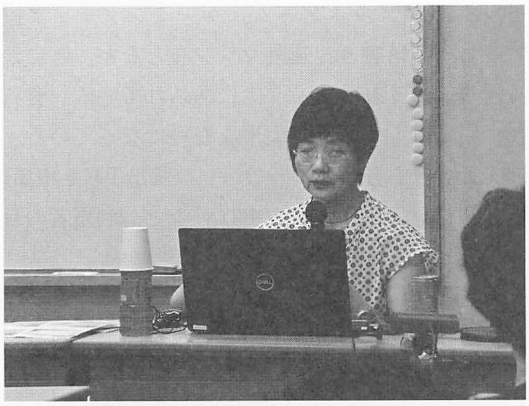
◆膨大な資料を1年間かけて収集し，簡潔にまとめていただき，ありがたい。

◆スライド資料にQRコードがあり，話を聞きながら詳細を知りたいときに資料・情報に直接アクセスできてよかった。

2．講演　学校図書館と探究学習

東京大学大学院教育学研究科　教授　本田由紀

講演は，高校における探究学習を中心に，学習指導要領の記載に対して実態がどうなっているか，



ご自身の研究活動，各種の事例をあげて示し，実際に行われている探究学習の問題点を指摘し，学校図書館・学校司書の果たす役割を提案する内容だった。

探究学習の話の前に，日本の教育の特性として，指導実践の乏しさ（一斉に行う学習に偏る傾向），科学学習の特徴（楽しくない，活動をやっていないなど），試験不安が強く学習への動機づけが低いことが，資料・図表をもとに話された。

2018年改訂の高校学習指導要領で，「総合的な探究の時間」と名称が変更され，「質の高い探究」が求められることになった。指導要領解説による「質の高い探究」の説明に対して，果たして実態はどうなっているか。ご自身が行った研究は，ある学校の探究学習のためのTA（ティーチングアシスタント）募集に，大学院生とともにTAとなり，そこで交わされた会話を録音して会話分析を行うというものである。この会話分析から，指導者（TA）の指導内容を分類分けし考察した結果，学習指導要領解説の探究学習は，高校現場の探究学習がはらむ現実的な障害に比して，過度に理想化されているとのことだった。また最終成果を見ると，充実しているケースとそうでないケースとの間のバラツキが大きいことが指摘された。別の高校のアンケート調査からは，探究学習が比較的うまくいっている学校ではあるものの，とりくむ態度の差にバラツキが見られること，気になることとして家族の支援の有無，ひいては教員の支援の有無による不公平が生じているのではないかとの指摘があった。

さらに生成AI（ChatGPT）についての問題，探究学習と情報・AIリテラシーに関する岩波ジュニア新書の近刊２冊，東京大学の附属中等教育学校の資料，高校生の探究学習についての論文の紹介があった。こうした資料を通して，学校図書館・学校司書のレファレンスが重要であること，高校と大学図書館の連携が課題であること，今後の課題等が述べられた。

教育全体の問題として，国に対して次の３点を訴えたことが紹介された。①正規教員の増員と少人数学級化によるきめ細かい公教育の実現，②高校・大学の入学者選考等の変革による「学校歴社会」から「学習歴社会」への変更，③子育てと子どもの教育に関する保護者の経済的・精神的な責任・負担の軽減。

質疑応答では，会話分析に関する質問と探究学習において学校がとりくむべきことの質問があった。学校では，インターネット記事２本ぐらいで研究をするのでなく，質の保証された文献や情報と結びつけること，また「数える」手法が大事とのことだった。内容が多岐にわたり，刺激的な講演となった。

【参加者アンケートより】

◆ジェットコースター的，かつ毒舌を交えつつのパワフルな話しっぷりに私の脳も活性化したようだ。日本の「探究学習」の現状について実証的な分析を通じて問題点がリアルにあぶり出された。学校図書館の探究学習への関わり方・連携のあり方は学校司書にとって必須の課題であり，大きな示唆を受けた。

◆まさに悩んでいる探究学習について，研究の立場からお話を聞けてとても勉強になりました。論文を読みたいと思います。レファレンス力をみがいていきたいと思います。また，学術論文の入手についても，とても課題を感じています。学校図書館界で考えていけたらと思います。

◆エビデンスの明確な報告でとても参考になりました。特に会話分析から「高度化」と「自律的」の矛盾を描き出した件が興味深かったです。改めて言語化がなされたことで，自分で考えなさいと言いつつ，一方でそれを本気で探究するのは大変だよ，というようなメッセージを送ってしまっている自分（学校司書）の対応を意識化できました。また探究学習が玉石混交になってしまう要因が多数あることも学びました。よりメタな認識としては公教育のシステムの構造的な問題があることも知りました。（後略）

＊

集会日程の２日目は，報告３本と研究討議が行われた。

３．報告１　学校図書館を知らない司書が学校図書館を作ったら

埼玉県立飯能高等学校すみっコ図書館
学校司書　湯川康宏

50歳を過ぎるまで公共図書館勤務，希望して学校図書館に異動した。「どんな生徒にも必ず居場所が見つかる図書館」をコンセプトに図書館づくりを行い，最近は新聞記事でとりあげられるなど，話題の学校図書館である。報告も，参加者がスマホでコメントを書き込む，YouTube動画を見るなど，他の報告者と一味違う展開だった。

図書館は全体として，５色で色別にゾーン分けをして，そのゾーンに合わせた設備，資料コーナーなどがある，という感じだが，コタツ，ハンモック，パズル，ゲーム，ゲーミングチェア，コーヒー，落書き，運動マシンなどなど，とにかく図書館づくりのアイデアにあふれている。資料については，マンガが大事な資料になっている，「あなたをまもる本コーナー」（貸出手続き不要）「際問い本」コーナー（LGBTQ）など，利用者の目線に立って考えられていることがわかる。

報告では，管理職に理解してもらうためのノウハウ，独自の図書館評価指標などが印象に残る。

【参加者アンケートより】

◆たいへんバイタリティあふれ，報告もワードチョイスがおもしろく，楽しいお話で，あっという間でした。見学に行ってみたいです。

◆一見，突飛なことをしているようにも見えるが，図書館の基本機能は一切損なっていない。むしろ図書館サービスの本質を追究した結果であり，その姿勢は手本としたい。

◆子どもたちとの触れ合いを大切にされて，高校生の実態や気持ちに寄り添った図書館作りがされていてとても素晴らしかったです。ともすれば，周囲からいろいろ言われそうで，とても勇気が必要だったこともあったのではないかと思います…。子どもたちが利用したくなる図書館を貫かれていました。湯川さんが小学校の学校図書館司書さんになられたら，どんな図書館を作られるかも，とても気になります。

４．報告２　社会科の授業づくりで考えていること

元中学校社会科教諭　福田恵一

報告は，「日本の産業革命を岡谷から考える」という授業を参加者が体験する形式で行われた。映画『あゝ野麦峠』の話から，生糸について，繭からどうやって糸をとるかを実際に見る。糸をとる，糸繰り，製糸。綿花や羊毛の場合は，短繊維なので「糸をつむぐ」，製糸ではなく，紡績であるなど。日本で製糸工業から産業革命が始まったのはなぜか，模範工場が富岡に作られたのはなぜか，

工女さんの写真にあるカラクリとは，などの問いが発せられる。

この話がどう学校図書館に関わるのか，参加者のとまどいは，終盤になって理解へと進む。

教科書の記述に入る前に，モノそのものを知ること，体験することが大事ではないか。ひろがり，つながりが大事である。社会科で考える，探究することの意味など。社会科の授業づくりで報告者が大事にしていることは，学校図書館においても重要な視点だった。

【参加者アンケートより】

◆生徒が「わかった」と感じることを何よりも大切にしている姿勢に感銘を受けました。探究学習でも「知りたい」「わかった」という積み重ねが必要と思いますが，自律的・主体的の言葉の裏で深い学びとなっていないことも多いのではないかと反省しました。

◆教室で，一方的でない，生徒とのやりとりを大切にする授業，自分が生徒ならこういう先生に習いたいと思った。また，以前はこういう感じの先生がそれなりにいたように思うが，気づいてみれば最近はあまり見かけなくなった気もする。「分かった」という思いを大切にしたい，という部分が，図書館員と共通するように思えた。

◆「体験してこそ腑に落ちる」が印象に残りました。

5．報告3　どうする！これからの学校図書館～宮ノ下っ子を深い学びへと誘う～

鳥取市立宮ノ下小学校　学校長　武林真理
学校司書　津村玲子

鳥取県は学校図書館に力を入れている県である。高校の報告は聞く機会があったが，小学校の報告ははじめてである。学校長と学校司書による報告である点が興味深い。

学校長が，図書の利活用に関して，積極的な役割を果たしている。報告では「発信・広報の機会を生かしてひたすら種をまく！」とあり，全校朝会・全校集会で校長自ら本の紹介を行ったり，図書を活用した授業や図書委員主催のイベントに参加し，読み聞かせやビブリオバトルを行っている。保護者や地域に向けての情報発信も行う。

鳥取市の学校司書は，1校1名の全校配置，週30時間勤務である。報告は，館内の環境整備からはじまる。実践の指針には，鳥取県立図書館学校図書館支援センター作成の「とっとり学校図書館活用教育推進ビジョン　改訂版」「情報活用能力系統表」があがっており，県立図書館の支援の一端がわかる。子どもを学びに誘うために行うさまざまな活動（図書館の役割を伝える，授業活用例の提案，学びのプロセス掲示など），工夫された授業実践が紹介された。授業実践の最後が，5・6年生国語のビブリオバトルの動画で，子どもがしっかりと話している姿が印象的だった。

【参加者アンケートより】

◆学校司書を生かすも殺すも，管理職が学校図書館教育に理解・関心があるかどうかがすべてです。先生方を巻き込んでの学校図書館利活用は，司書教諭と学校司書だけではできません。「学校司書が変わると，学校図書館も変わる」多くの実践を知ることができました。また，鳥取県の学校図書館教育を取り巻く現実も知ることができ，勉強になりました。

◆校長先生が「図書館長」としての自覚をお持ちで，熱心にPRされていることがすばらしいです。学校司書の正規職員化が実現するよう願います。

◆報告１とはまた別の，管理職と学校司書，司書教諭がよい関係で図書館運営を積み重ねてきた実践に，見習ったり取り入れたりできることがまだまだたくさんあると思った。県立図書館による県下の学校への支援体制が，もっと全国に広まることを願う。

６．研究討議

昨年に続き，会場とオンライン併用で行う研究討議である。報告者に対する質問からはじまった。

報告１，報告２についても，参加者とのやりとりが行われたが，報告３の鳥取県立図書館学校図書館支援センターの活動について，参加された支援センター職員の方から直接話を聞くことができた。支援センターが行う研修である学校図書館活用教育普及講座，学校司書のためのICTスキルアップ講座についてである。また鳥取県で取り組まれている司書教諭の持ち時間数軽減の状況，学校司書の抱える課題なども話題となった。

学校図書館の役割を問い直すきっかけになればと思うとともに，学校図書館をとりまく諸状況の多様さ，厳しさについても考えさせられた。

【参加者アンケートより】

◆私は本田先生が指摘された「試験不安が強い」と「学習への動機づけが低い」ことが気になっています。そうであれば自律的であることも主体的であることも不可能と思います。それに対して，討議の中では児童生徒の疑問に関わる（フォローアップする）人がいることの大切さが共有されたのではないかと思いますし，司書（司書教諭）としてレファレンスや資料提供という基本をきちんとすることが大切とのご意見に共感しました。

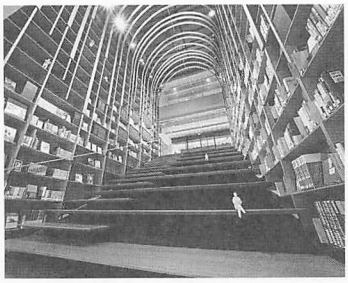
◆今回は，さまざまな立場からの講演や報告があり，視点を変えて考えることができて，とても充実していたと思います。

（たかはし　えみこ：JLA学校図書館部会幹事）
［NDC10：017　BSH：学校図書館］

小規模図書館奮戦記 その306

早稲田大学国際文学館
(村上春樹ライブラリー)

呼吸をはじめたライブラリー



高橋由里子

早稲田大学国際文学館（村上春樹ライブラリー）は，当初の計画から半年後，なお新型コロナ感染拡大防止が求められる状況下で，2021年10月1日に開館した。大学内外の人びとの活発な交流を促しながら，文学資料館，そして図書館の機能を果たそうとする当館の，開館に向けたエピソードは，村上春樹氏本人のものも含め，これまでいくつか発表されているが（その一つとして『文學界』2021年11月号所収，辛島デイヴィッド「象牙の塔の消滅？」），図書について，職員の視点からの報告は初めてかと思う。

当館は多層階で，フロアごとの役割は違うが，書架は大きく三つに分かれており，順番に紹介する。

1．研究書庫

原則として，研究者のみに入室を認めている。村上春樹作品やその翻訳書が主要なコレクションである。また作品や著者に関連した記事を資料として収蔵し，そのデータベース化を進め，段階的に公開しているが，研究的価値が期待されている。（国際文学館助教　栗原悠による。）

2．ギャラリーラウンジ

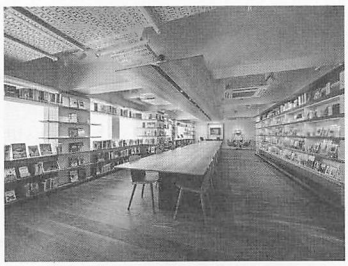
研究書庫と蔵書構成は多く重なっている。入館制限のない1階にあるので，村上春樹文学を総覧することができる。50を超える言語で同時代の作家に触れている人たちが存在しているという事実に圧倒されるが，パンデミック下，なかなか帰国がかなわなかった留学生が自国の言葉の本を見つけて励まされた，という話も聞いた。

作家デビュー以来の村上作品初版本の展示も見どころとなっており，スペースから奥に進んだ壁面に掲げられた「村上春樹著作年譜」と照らし合わせた観賞も一興だろう。（年譜は，国際文学館助教　権　慧による。「国際文学館アネックス」サイト上でも公開予定。）

3．階段本棚

正面入口から入った来館者が最初に目にする「階段本棚」は，当館の象徴的な場だ。設計を担当した隈研吾氏は，インタビューなどで「村上ワールド」を表現する「洞窟」や「穴」という言葉で狙いを語っているが，地階から「階段本棚」を見上げると，まるで「井戸」の底にいるような感覚を覚えるだろう。その建築的意図を損なわぬよう，配架計画は縦分割で考えられている。

2023年現在，「階段本棚」は二つの企画で構成されている。その一つは



国内外の識者からの推薦書による「現在から未来に繋ぎたい世界文学作品」で，当館が「村上春樹文学」研究に加え「国際文学」「翻訳文学」の研究の進展を目指している方向性を選書で体現しようとしている。もう一つは「村上作品とその結び目」。20のテーマ設定をし，村上春樹作品をキーブックにして，関連書を並べている。一冊の読書から関心が広がる可能性を感じてもらう工夫だが，階段＝ステップを上がると，身近で具体的なテーマから重厚で抽象度の高いテーマに移っていく。BACHの幅允孝氏によるこの提案は，NDC分類をベースに便宜的に配架していく学術図書館の知見しか持ち合わせない筆者にとって，実に新鮮で大いに刺激を受けた。（参考：『BRUTUS』2021年10月15日号（特集　村上春樹　上）所収，幅允孝「風をあつめて」）

おわりに

ギャラリーラウンジ入り口にある村上春樹氏のメッセージの一節に「息をしやすい学びの場」となることを祈っている，とある。開館以降継続して企画している展示やプログラム，そして活発な図書利用によって，さらに息吹を感じられる研究拠点となるだろう。期待されたい。

開館時間は原則10:00-17:00（水休館）。最新の情報は当館公式サイトでご確認いただきたい。

（たかはし　ゆりこ：早稲田大学国際文学館（村上春樹ライブラリー））

［NDC10：910.6
BSH：早稲田大学国際文学館］

れふぁれんす三題噺 連載その三百六 国際教養大学中嶋記念図書館の巻

生成AI時代のレファレンスサービスとは

◆
相場洋子

国際教養大学ではすべての授業が英語で行われるため，多くの新入生は入学してすぐ英語集中プログラム（English for Academic Purposes＝EAP）を履修し“アカデミックイングリッシュ”を身に着けることになります。アカデミックイングリッシュとは，“本学や留学先の大学において，英語で行われる講義を理解し，自らの考えを発信して，論文をまとめるなど，学問を深めていくために必要な英語力”のことです。英語集中プログラムには，図書館リサーチワークショップとして，図書館のリソースを使ったリサーチの基本を紹介する1コマを設けており，毎回担当教員の意見を聞きつつ学生のフィードバックへのコメントから学び，より良い内容にしていくように努めています。

コロナ禍には速やかにZoomを利用したレファレンスサービスを導入し，図書館紹介動画のオンデマンド配信も行ってきました。対面授業再開となってからは，図書館内にリサーチの相談エリアとして別置したヘルプデスクで，リサーチサポートの見える化を図っています。2023年度からは，本学利用者限定のヘルプデスクウェブサイト（以下サイト）を開設し，本館作成の図書館オリエンテーション動画の再生リストへのリンク，過去のレファレンス例，お役立ちサイトや動画トピックの相談申込書の掲示を始めました。“困ったときに問い合わせるところ”のイメージが浮かびやすいため，以前の「レファレンスデスク」という名称から「ヘルプデスク」に改称し，利用してもらいやすいサポートを目指しています。

その1

○○というリサーチトピックについて，自分の意見と反対の意見をサポートする文献が見つからない

春学期には，世界遺産，絶滅危惧言語，大麻，SNSのようなさまざまなトピックについて，新入生から文献調査に関する問い合わせがありました。英語集中プログラムの課題で，自分で選択したリサーチトピックに関する問題を多面的に論じ，解決案を模索し，文章を適切に構成して最後に英語でプレゼンテーションを行います。そこで自分の主張と相反する主張をサポートする学術資料探しに苦労する学生は多いようです。このような場合，まずオンライン百科事典Britannica Academicで，リサーチトピックの定義を確認し，最近に至るまでの問題の流れをしっかり把握することをおすすめしています。百科事典は学術参考文献としてはカウントされませんが，オンライン百科事典は，分かりにくいワードをクリックして，さらに深く学ぶことが簡単にでき，関連する信頼のおけるウェブサイトの情報なども盛り込まれているので，英語の語彙力を伸ばすことにも役立ちます。一方自分が探しているキーワードが，データベースの項目にマッチしないと検索結果に出てこないので，Google検索に慣れ親しんでいる多くの学生達は，存在しないものとして諦めてしまう傾向も見られます。このような図書館のデジタルリソースの“使いづらさ”を学生が感じたときは，検索ワードの類義語やほかの表現を提案し，調査力をフル活用して役に立てるチャンスだと思っています。

また普段から携帯，パソコン，タブレットを眺め慣れた学生達にとって，岩波・中央公論などの新書やOxford University PressのVery Short Introductionsのような海外の大学出版の入門書シリーズは，図書の便利さに気づいてもらえるきっかけになりやすいようです。簡潔に幅広いトピックをカバーしているので，ヘルプデスクに来てくれた学生には必ず何冊か引っ張りだして，索引と目次を一緒に確認してからおすすめしています。OPACだけだと，リサーチのトピックを反映した内容かどうか判断しきれない場合が多く，またスペルの間違いなどを受け付けない弱点を補う必要がありますので，Google検索で上記のシリーズの中に内容の合うタイトルがあるかどうかを検索するのもおすすめです。

その2

昔読んだ本のタイトルが思い出せない

うろ覚えの本の内容から，タイトルをOPACだけで特定するのはかなり難しいことです。問い合わせ内容からキーワードを考えて，いろいろGoogle検索しても，問題の本のタイトルは少しもヒットしないこともしばしばです。そのようなときにはsite:ameblo.jpのように人気のブログのサイトに絞ってGoogleでキーワード検索してみるのも有効な方法の一つです。読書の感想や，登場人物の情報など，SNSの存在は見落とせない貴重な情報源であることは間違いありません。さらにGoogleブックスでブログから判明した登場人物の名を検索すると，書影が検索結果のトップにでてくるので，探している本を確定することもできます。

少し脱線しますが，最近話題のChatGPTで本探しを試してみられた読者もおられるのではないでしょうか。私も早速，本のタイトルを思い出せないときにはどうすればよいか，と尋ねてみました。すると「インターネットで検索してみる」や，「SNSで呼びかけてみる」という回答が数秒で出てきました。なぜ司書に最初に聞かないの，と少し意地悪な質問を投げかけると，素直に「おっしゃる通りだ，最初の手順の中に司書に尋ねるという手順が含まれていなかったのは自分のミスだ」と返答がありました。数日後本のタイトルの調べ方についてもう一度質問したところ，オンライン検索，書店や図書館のカタログ検索，ソーシャルメディアなどのコミュニティで質問するなどの後に，書店や図書館のスタッフに相談すると出てきたので，聞きようによっては図書館やそのスタッフも登場するようです。

その3

リサーチトピックについていろいろな意見があるので迷ってしまう

どのような時代であれ，レファレンスで最もスキルが求められるところは，考えがまだよくまとまっていない質問者の話によく耳を傾け，タイミングよく効果的なレスポンスをして，質問者自身が質問を明確にして答えを見出していくプロセスのサポート役に徹するところではないでしょうか。生成AIは膨大なデータに基づいて即答してくれる可能性を秘めた魅力的なツールです。しかし質問の仕方とタイミングによってその答えにばらつきがあり，誰も管理していない新情報が次々に生まれるインターネットの世界で，そのとき得られた回答がどの情報に基づいていて，いつまで正確なのか，そのあたりがはっきりしません。私はリサーチサポートが役目ですので，データベースの選択，検索ワードや絞り込みの見直しのご提案を積極的に行い，さらに文献の種類や研究方法を比較したりして，文献探しのお手伝いをしています。

最後にインターネットのなかった時代のレファレンスサービスについて少々調べてみたことを，共有させていただきたいと思います。

1924年，帝国図書館は「読書相談部」を設け，図書館員が直接図書館利用者に文献検索などのレファレンスサービスを開始しました[1)]。最後の帝国図書館長を務められた故岡田温（ならう）先生は，1953年に山形県立図書館で，レファレンスワークについて講演されています。帝国図書館は1947年には国立図書館と改称され，さらに翌々年国立国会図書館と統合されることになります。長年国立国会図書館で受入整理事務の目録ご担当であったという岡田先生は，「資料と資料を探求する人との間を取り持ってやるのがレファレンスワーク」と説かれました[2)]。また「司書の主たる任務は公共のメンバーに，読書や研究を促すこと。つまり，道案内（guide and direct）はするが，メンバーが自分自身のイニシアティーヴで動いてゆけるようにしておいて，消え去ってゆくことが必要であろう。幅の広い知識と無私の如才なさ（Tact）を兼ね備えた，奉仕精神の持ち主でなければ」ということを“よく弁（わきま）えておられた”そうです[3)]。DXの便利さやスピードを重視しがちな現代においてこそ，この促しの行為の意図とは何であったのかを，我々司書は忘れてはならないと思います。

■参考文献

1）長尾宗典．帝国図書館－近代日本の「知」の物語．中央公論新社，2023，p.196-198，p.235-250.
2）岡田温．レファレンスワークについて．山形県立図書館，1953，p.7.
3）中村初雄．岡田温先生を偲びて．日本図書館情報学会誌，2001，47(1)，p.47.
https://doi.org/10.20651/jslis.47.1_46

（あいば　ようこ：国際教養大学中嶋記念図書館）

［NDC10：015.2　BSH：レファレンス　ワーク］

図書館員のおすすめ本㊸

お金の流れで読み解く　ビートルズの栄光と挫折

大村大次郎著　秀和システム　2022　¥1,500（税別）

ビートルズの手法を通じて，音楽ビジネス確立の過程を紐解く異色の一冊だ。特に「５人目のビートルズ」とも呼ばれたマネージャー，ブライアン・エプスタインの手腕が冴えに冴えている。

エプスタインは，ビートルズのデビュー前から1967年の急逝までマネージャーを務めた人物だ。もともとはレコード店の経営者だったが，アマチュア時代のビートルズのライブを見て一目惚れ。すぐレコード店を辞めて，マネージャーを買って出たという逸話が残っている。当初からエプスタインが異色だったのは，メンバーに作詞と作曲を任せたことだ。当時の常識は演奏，作詞，作曲の分業制で，報酬は演奏者と曲の作者に分配されていた。しかしビートルズは，オリジナル曲を自ら演奏することで，桁違いの報酬を得ることに成功した。シンガーソングライターの走りである。また，４人全員にボーカルを任せて，各メンバーへ脚光を当てることにも注力。アイドルグループにも共通するが，魅力的なメンバーが複数いると，ファン層を広げて爆発的人気につなげられるのだ。加えて，エプスタインの豊富な音楽知識が，世界進出を決断する物差しとなった。もともとビートルズの４人は，リバプールの不良少年たちである。プロ志向はあったにせよ，最初から世界進出までは想像できなかっただろう。しかしエプスタインは，レコード店時代に触れた多くの音楽と比較しても，４人の才能が際立っていることを見抜いていた。だからこそ，躊躇せずに世界進出を決断できたのだ。エプスタインの慧眼が，音楽ビジネスの歴史を大きく変えたことがおわかりいただけただろうか。

著者の大村氏は税務コンサルタントで，お金のスペシャリストである。本書ではプロ視点で，ビートルズの犯したビジネス上の失敗まで鋭く言及している。音楽のみならず，仕事やチームワークを考える一助となること間違いなしの１冊である。

（北嶋大祐（きたじまだいすけ）：国分寺市立もとまち図書館）

弱い力でも使いやすい頼もしい文具たち

波子著　小学館クリエイティブ発行　小学館発売　2022　¥1,300（税別）

たとえば，この本は見開きで置いて読めるのだが，置いてみると「へえ～，押さえなくていいんだ」とわかるように，健常者（便宜上健常者とする）にとってもフツーに便利でやさしい。なるほど便利だ。だが，それはつまり，その作業が実はどれほどたいへんか，ということでもある。

普段なにげなくできてしまうことは，それがたいへんな人の困難さはわかりにくい。ちょっとケガをしたときに「意外とここ使うんだ」と気づいても，のど元過ぎれば忘れるもの。しかし，ある人には，そのたいへんさ，不便さは，ずっと続くし，なんなら困難さが増していくのだ。

と言っても，著者の波子さんはそのたいへんさを言っているのではない。開発に携わったひとに感謝し，ただ誰かの「ちょっと不便」がこれらの文具でラクになることを願っているのだ。私たちは，いかに複雑でさまざまな機能を使いこなしているか。自分の体しかり，モノしかり。そこから丁寧に解き明かしつつ，なにがどう困るのかを考え，どこがどう違うのか，実際に試された文具たち。モノがただ自立して立つだけでその作業は格段にラクになるなど，それを使うとどう助かるかもわかりやすく書かれている。

困難を抱えた人にやさしいモノは，たいていの人にやさしい。文具に興味がなくても，誰にとっても優しい社会を考えるツールでもあるのだ。

自分が，家や職場で自分と一緒に過ごす誰かとが，少しでも快適に作業するための文具を選ぶもよし，ただ読むだけでもよい。この本には，かわいかったり，楽しげだったりする文具たちが紹介されている。それも，素直な気立てのいい文章と，波子さん独自の工夫を重ねた撮影で。筋力が低下していく中，それを受け止め，できることを大切にしておられる波子さんの文章は，読むだけで心地よく，写真には文具愛があふれている。

（前田幸子（まえださちこ）：島根県西ノ島町コミュニティ図書館）

図書館員のおすすめ本㊸

理数探究の考え方

石浦章一著　筑摩書房（ちくま新書）2022　¥860（税別）

2018年改訂の高校の学習指導要領は「戦後最大の教育改革」とも言われており，その改革の一つとして新科目「理数探究基礎」「理数探究」が掲げられている。

本書は，数学的思考能力や自分で納得のいくまで調べるという生き方がこれからの社会に必要であり，それが「探究」で培われることと，教えられる教育から自分で学ぶ教育への転換の本質について，新科目「理数探究」と「サイエンスコミュニケーション」を題材として，多様な事例を通して紹介しているものである。

「探究」は，数学と理科の知識や技能を総合的に活用して主体的な探究活動を行うもので，これまでにない画期的な科目とされる。

日本の子どもたちは，先生に言われたことをするだけで，自分で何かを調べようとしないことや，中学校あたりで，論理でものを考える物理や数学が嫌いになってしまうことを著者は問題点として認識している。文部科学省のスーパー・サイエンス・ハイスクール（SSH）事業で探究的な学習を高校生に実施したところ，これらの問題点を解消し得るよう生徒の能力が向上したことから，この「探究」の取り組みの重要性を主張している。

また，「探究」の授業の具体的イメージがつかめるよう実際の探究の授業例をいくつか挙げるとともに，理科教育の重要性を，対照実験や，相関的研究といった実験のデザイン，フェルミ問題を解く能力など具体例から説明している。

さらに，科学的に考えることの重要性に鑑み，サイエンスコミュニケーションの必要性について，その歴史とサイエンスカフェなどの実践例を紹介している。

図書館は，この「探究」を社会人がするための拠点の一つであることから一読をお薦めしたい。

（米田（よねだ）　渉（わたる）：成田市役所，日本図書館協会認定司書第2052号）

マッピング思考　人には見えていないことが見えてくる「メタ論理トレーニング」

ジュリア・ガレフ著　児島修訳　東洋経済新報社　2022　¥1,800（税別）

物事を大局的に捉えるには，視点を変える必要があるのではないか。もっと俯瞰して物事を見ることができるようになりたいと考えていたところに出会ったのが本書である。本書では，偵察隊のように目の前にあることをありのままに捉え，地図を作るように俯瞰的に考える思考を「マッピング思考」と名付け，その思考を定着させるための方法が紹介されている。

物事をありのままに捉えることは，一見簡単にできそうだが，実は難しい。なぜかというと，人間にはこうありたいという動機や信念が存在し，無意識のうちにこれらに基づいて物事を見るからだ。信念に反する事実がそこにあっても，自分を守るために捻じ曲げて捉えてしまう。これでは，現実と正しく向き合うことができない。

どうしたら自分を守る思考に左右されずに物事を見ることができるのか。そもそも人間は完璧ではない。新しい情報を得て考えを変えることで精度を高めていくことができると著者は言う。自分の意見に比重を置きすぎず，こだわりを捨て，視点をしなやかに保つことができれば違う意見をくもりなく見ることができる。

俯瞰的に物事を見るには，自分の意見に固執しがちな人間の性質を知っておく必要がある。自分が守りの思考に陥っていないか常に疑いつつ，マッピング思考で物事を捉え，間違いを修正しながら生きていくマインドセットが身につけば，今よりも生きやすくなるような気がしている。

（古澤理恵（ふるさわりえ）：熊本県大津町立おおづ図書館）

［NDC 10：019.9　BSH：書評］

声－各地の代議員から⑦

地域図書館団体との協力体制強化を！

長田和彦

私は富山県図書館協会（以下県協会）で９年間，事務を担当していた。県協会は2021年に創立90周年を迎え，当初から日本図書館協会（以下協会）とは連携協力し，共に図書館の進歩発展に務めてきた。県協会の活動を一つ紹介したい。2006年より毎年「図書館資料購入費の増額について」の要望書を，県内市町村長に対し県協会長名で提出している。資料費削減傾向にあって，根拠となる予算要求資料を作成するのはなかなか難しい。県協会では，県内図書館の後押しとなるよう本事業に取り組んでいる。

協会でも今年５月，都道府県知事，市長，東京23区長宛て「図書館非正規職員の処遇についてのお願い」という要望書提出があった。このような行動は，単発で終わってほしくない。地域図書館団体と連動して，図書館を支える行動や運営を力づける情報提供を協会には望みたい。

近年，協会と都道府県図書館協会との関係が希薄になっているように感じる。昨年11月，「団体会員（地域図書館団体）のつどい」が初めて開催された。私は協会を力強くするためにも，地域図書館団体との協力体制を再構築すべきではないかと考えている。協会の「会員の種類及び会費に関する規程」によると，団体会員とは「市民団体（図書館友の会，読書会等），地域図書館団体（都道府県・市区町村図書館協会等）及び図書館研究団体（学会，図書館研究会，大学司書課程構成員グループ等）である会員をいう。」としている。代議員選挙区は第６区（市民団体），第７区（地域図書館団体），第８区（図書館研究団体）に分けているが，今期，第６，第７区では代議員を選出していない。

協会が公益社団法人移行前に評議員制を採っていたときは，県協会等の団体は加盟団体扱いであり，代表者は評議員であった。県協会長も評議員として，協会へ相談や意見をしたものだった。代議員総会の活性化を図る上でも，議論すべきところではないか。

（ながた　かずひこ：富山県個人会員選出代議員，富山県立図書館）

議論の前提となる正確な統計の公表を

本山雅一

公立図書館の現場で仕事をしていたとき，類似規模自治体の図書館の統計数値を比較することがよくあった。教育委員会等へ説明するには，正確な数値でなければならない。そのための基本資料として『日本の図書館　統計と名簿』を参照してきたが，その数値に見過ごすことのできない疑問点があることに気づき，正確な比較資料が作成できなくて，そのつどもどかしい思いがした。

すでに2015年に「なぜ『日本の図書館』の統計数値には誤りが多いのか」という論考が発表されている[1)]。職員数，個人貸出点数，予約件数，予算額の図書館費という基本的な数値について，統計上の疑問点が数多くあり，非常に大きな数値にかかわる点もあることが実際の事例により指摘されている。さらになぜ誤りが起こるのか，調査票の形式の問題や記入内容に対するチェック体制の不備を指摘したうえで，その改善策についても具体的な提案がなされている。

しかし，論考の指摘で改善されたとは聞いていない。いまも『日本の図書館』では指摘と同様の事例があるし，別の新たな事例も出てきている。

図書館の実態を知り，各地の図書館の活動に学んでこれからの図書館のサービスのあり方を考える上でも，説明責任の観点からも，正確な統計は必須である。図書館が情報提供機関であるならなおさらではないだろうか。日本図書館協会には前向きに改善してほしいし，各図書館にもできることはある。県立図書館での県内統計集計表の作成と公表，各市町村立図書館での自館統計のホームページ公表などは，未実施ならぜひ取り組んでほしい。

注

1）田井郁久雄「なぜ『日本の図書館』の統計数値には誤りが多いのか」『談論風発』Vol.10　No.1　2015.7（『図書館の基本を求めて　Ⅷ』大学教育出版　2016に収録）

（もとやま　まさかず：岡山県個人会員選出代議員，ノートルダム清心女子大学非常勤講師）

［NDC10：010.6　BSH：日本図書館協会］

図書館員の本棚

調べる技術

国会図書館秘伝のレファレンス・チップス

小林昌樹著

東京 ： 皓星社
2022. － 183p ： 21cm
ISBN ： 978-4-7744-0776-0 ： ¥2,000（税別）
NDC10：002.7：007.58
BSH：情報検索；文献探索；レファレンスサービス

インターネット上に各種情報があふれている現在，それをどのように活用できるかによって，調べた結果の差が大きくなる。その差を埋めるために，調べる方法を知っているのみならず，調べ方を考えられるようになることが重要であり，その一助となる本である。

インターネット上での連載である「在野研究者のレファレンス・チップス」をまとめた本書は，昨年12月の刊行後，『週刊新潮』『東京新聞』『読売新聞』『朝日新聞』『週刊文春』など図書館情報関係以外の雑誌や新聞で多く取り上げられている（版元ウェブサイト）。

著者は，慶應義塾大学で西洋史を学び，その後図書館情報学を修め，国立国会図書館に就職後は，主として資料組織化（分類件名の附与）とレファレンス・サービスに従事し，図書館史や，近年は近代日本の出版史にも関心を持ち，近代出版研究所を設立し，『近代出版研究』を2022年から発行している。本書の内容は図書館情報学の実践――業務を通じての経験や，考え，感慨――を記し，サブタイトルにあるように国立国会図書館内でも文字になっていなかった調べる際の技術や工夫について，具体例を出しながら明らかにしている。

“調べる技術”というタイトルは汎用的であるが，すべての分野をカバーしているわけではなく，対象となる読者も限られている。「はじめに」を読むと，主に近代以降の人文社会的なことを調べる人や，専門的な学問領域から外れたり，またがったりしている分野を調べる人（司書も含む）が対象読者のようで，科学や技術，医学，法学といった従来から専門データベースが充実している分野を記載していない。これが大きな特色である。

「はじめに」で，「この本は実務マニュアルなので，この章を読まずに目次を見て，各章から読み進んでいただいて全く構わない」とあるが，司書であれば，ここは丹念に読むのが得策であろう。レファレンス・ツールの凡例のようなものなので。以下，全14講と“おわりに”にあたる「同じ魔法が使えるようになるために」とコラムで構成されている。各講をグルーピングしてみたい。

１講と２講は〈調べるための前提〉で，Googleを例に質問の程度を見分け，日本語文献の大まかな状況を示し，調べを開始する前に，どのようなことを調べようとしているのか「アタリをつける」重要性を指摘している。３，４，５，７講は〈文献・情報源を探す〉案内で，国立国会図書館の人文リンク集，人物を調べる３類型，知らない分野の文献を件名で調べる方法，各種雑誌記事索引を比較。６，８，９，10講は〈文献・情報源内の記載を探す〉案内のようで，広くいえば「索引」であり，新聞の索引，図書の索引，Googleブックスや次世代ライブラリーの引き方を提示。11～14講は〈調べる際の考え方や工夫〉で，レファレンスの発想法である。

索引も充実し，書名，人名，事項のみならず，独特な調べ方名のフレーズも引ける。参考文献一覧はないものの，本書を読めば各自で調べられるようになるということであろう。

また，読み進めてゆくと，全体として，調べ方の掛け合わせや，ツールを用いる際に「どのように問いをたてるか」ということの重要性も浮かび上がってくる。なかでも，第12講での，レファレンスの結果から推論を行うことなどは，レファレンスの延長ではあるが「調査」と区別しがたいのではないだろうか。著者による実例として，近代出版研究所設立や『近代出版研究』創刊の経緯について図書館情報学的に説明している「E2492－「レファレンスと研究の関係性：『近代出版研究』創刊」（カレントアウェアネス-E No.435, 2022.05.26）にも目を通すとよい。

本書の背景には図書館情報学の成果が織り込まれており，その知見があれば，よりよく理解できるであろう。司書であれば，読んで損をすることはなく，いろいろなヒントが見つかるように思える。

なお，著者は版元のウェブサイトで“Webコラム「大検索時代のレファレンス・チップス」”を連載中である。

（鈴木宏宗（すずきひろむね）：国立国会図書館）

図書館雑誌では，「北から南から」欄への会員のみなさまからの投稿をお待ちしています。館界や本誌へのご意見，個人やグループなどの活動報告，研究成果，また，日常業務の中で工夫していることなどを，下記の要領でお寄せください。
★字数：1200〜3800字程度（図版・写真を含む）
★送り先：〒104-0033 東京都中央区新川1-11-14
日本図書館協会　図書館雑誌編集委員会「北から南から」係
（FAX (03)3523-0841でも受け付けいたします）

避難民危機におけるポーランドの図書館の対応

リリアンナ・ナレヴァイスカ
マウゴジャータ・ドゥトカ訳

図書館はどんな時でも反応する。利用者の個人的な要望に対応し，社会的グループを支援し，危機的な状況のなかでも必要に応じて行動する。その活動は地域や国の規模で行われるが，時には越境することもある。近年，世界はパンデミック危機に直面したが，2022年上旬からはもう一つの悲劇が始まった。ロシアによるウクライナ侵攻のため，ウクライナ国民は絶大な苦悩に見舞われたのだ。この衝突の結果はウクライナの国境を越えて，ヨーロッパ諸国に衝撃を与えた。ウクライナ避難民の大多数を受け入れた隣国ポーランドは特にその影響が著しい。

ロシア大統領は2022年2月24日の深夜に国民向けに演説し，ウクライナとの戦争を宣告した。その時から約1500万人のウクライナ避難民が国境を越えて，ポーランドに入国。その多くはすでに帰国し，あるいは他国に渡っていったが，女性と児童の多くは今もポーランドに留まっている。その児童は学校に通い，就学を続けている。隣国で起きた戦争に直面し，ウクライナ国民を受け入れようと，ポーランドの国境だけではなく，ポーランド国民の心も開いた。図書館の扉もまた，ウクライナ避難民に対してとても広く開かれた。その支援は多様なもので，学校・大学・公共図書館のタイプを問わず実施された。多くの場合，図書館員たちが自主的に，すぐに行動し，地域住民やNGOなどと協力しながら活動した。支援の範囲は当初最も必要とされた物質的支援（例えば，ベビーカーやベビーベッドなど，チャリティ物品の収集や配布），行政的問題解決の支援（ネットアクセスの提供，案内所の創設など）から，象徴的な意味を持つ行動にまで及んだ。後者の例としては，図書館内の目立つ場所にウクライナ国旗を連想させる青と黄色のハート型を展示するなど，連帯の態度を表し，相互支援を奨励する企画「ウクライナにハートを」があげられる。

公共図書館は社会的信用のある機関なので，その重要な役割は避難してきた外国人に最も必要で確実な情報を提供することであった。ウクライナ避難民にポーランドの社会になじんでもらうため，児童や青年，大人を対象としたワークショップや研修，学習クラブ，語学授業や交流会などが開催された。例えば，ワルシャワ市ヴォラ区図書館ではプログラミング入門，音楽，造形，身体活動の授業やポーランド語コースが実施された。図書館での情報提供は広範囲に及び，ウクライナ語のできるボランティアが運営した地域情報案内所も数多く設立された。生活に最も必要な物資やウクライナ語の図書収集に加え，図書館ではバザーも開催され，売り上げはウクライナとポーランドの支援団体に寄贈された。さらに，デジタル教育センターも設けられ，ウクライナの児童や青年たちがオンライン学校に参加し，教師の支援を受けて学習できる場が館内に設けられた。

また，避難民の就職活動を支援する目的で，ポーランド国立図書館をはじめとした図書館ではポーランド語の授業や交流会が開催された。実際の規模は図り知れないが，ウクライナの図書館員に雇用の機会を与えた図書館もあり，ウクライナの司書はその結果として職を得た例がある。

ウクライナ国民と連帯を表明する行動は勤務外の時間を自主的に捧げ，労力を尽くした図書館員によってなされたことは強調に値する。図書館の活動目的はウクライナ出身の読者，特に避難民の子どもに母国の文学へのアクセスを保証することであった。可能な限りウクライナ語の図書を購入して，個人からの寄付も募ったほか，図書館は無料で閲覧できるホームページにウクライナ文学書のリストを載せ，公表した。

多数のウクライナ児童が通う学校

でも，オンラインで母国の文学に触れることができるように努めた。学校図書館はウクライナ史の重要な出来事や場所に関する展示をしたり，ポーランドの読書普及基金主催の企画「本は守ってくれる」に参加し，児童用のウクライナ語書籍のセットを無料で譲り受けたりした。一方，ポーランド図書館員協会（SBP）はウクライナ語の児童本が読めるWebサイトの情報を集め，生徒やその家族に提供した。

大学図書館は学校図書館とは少し異なる事業を展開した。通常，学外利用者にカードを有料で交付しているワルシャワ大学図書館はウクライナ国籍の利用者には無料の登録を認め，蔵書を開放した。そして，初心者用のポーランド語授業を開催し，約300人から応募があった。実施可能な範囲で，応募順に選ばれた37名が図書館で学習し始めたのは，戦争勃発からいち早く2022年３月22日と23日である。このコースは同年10月からも実施された。また，トルンのコペルニクス大学図書館では専用のパソコン席のある学習・休憩スペースが作られた。図書館員はそこで当番にあたり，印刷を手助けし，情報案内をした。シレジア図書館はヴロツワフ市のUA Future財団と連携して，ウクライナの児童施設と戦争孤児施設に送る物資の収集を実施した。

図書館員が率先して行った避難民支援事業は公式も非公式もあり，地域社会規模のものだったが，ウクライナ図書館界への支援表明も有意義だったといえる。ポーランドの図書館員はウクライナの文化遺産を守り，社会を支援するよう国際社会，国際図書館界と各国の国立図書館に呼びかけた。ポーランド図書館員協会をはじめとした図書館関連団体は#ZbibliotekarzamiUkrainy（ウクライナ図書館員とともに）というWebポータルを立ち上げ，そこに実施された活動の報告を掲載している。このWebサイトは図書館員が経験を共有するだけではなく，援助を探す場所でもある。

避難民危機は今も続いている。新しい環境で生活を始める際に生じる物質的な問題はおおむね解決されたが，ウクライナ避難民に対する図書館の支援は継続されている。筆者はいくつかの図書館に現状について問い合わせたが，回答を得た施設の企画は全国の図書館が実施している事業の代表的なものである。なかでも，ポーランド語の授業，ウクライナ語図書の収集，社会教育プロジェクトや交流会など，ウクライナとポーランドの児童から大人までがともに学び，遊び，関係を結ぶためのイベントはほぼ恒例になっている。図書館の活動は避難民の無料登録をはじめ，ウクライナ語で立ち上げた図書館の専用サイトにおける情報提供，図書館内の利用者用パソコンへのキリル文字キーボードの設置にまで及んでいる。上述のワルシャワ市立ヴォラ区図書館は，昨年からワルシャワ市民とウクライナ避難民の融合を共通理念とした事業を開始した。「自分たちを多様性の中に見つけよう」と題したそのプロジェクトは出会いとお互いを知りあう時間となった。そのもくろみは，避難民（主に子どもを持つウクライナ人女性）に，図書館を我が家のようなスペースと感じてもらう一方，避難民の世界観やアイディアを図書館員に伝えることであった。プロジェクトは2022年９月から12月までに実施され，ヴォラ地区での散歩，パネルディスカッション，編み物などのワークショップ，ヤーンボミングや交流会が行われ，計28回のイベントに222人が参加した。

他方，ポーランド南部のオポレ県立教育図書館では現在，教育機関の支援に力を入れ，ポーランド国内の学校でウクライナ児童を指導するために不可欠な，幅広い心理学・教育学的諸問題に関する文献を教員や学生に提供している。オポレ県に在住しているウクライナ出身の芸術家が参加する文化的催しも継続実施している。特に重要視されているのは最年少者向けの活動である。オポレ県の学校や幼稚園に通っているウクライナ児童は全員，教育図書館のみではなく，地域教育支援機関連盟が実施する企画，教育的事業や夏休みのイベントなど，すべてのサービスを利用している。

ロシアによるウクライナ侵攻から約１年半経った今，ポーランドの図書館の対応は変わってきたといえるが，その原因はウクライナ避難民の置かれている状況とニーズの変化である。とりわけ学校図書館と公共図書館の図書館員はウクライナ人社会の，ポーランド社会に溶け込もうとする強い動向を眼前にしている。それゆえに，一部の図書館ではウクライナ語図書への関心が薄れてきており，ポーランド語図書の利用は増加している。以前の活動，例えばウクライナ児童のみを対象としたワークショップはポーランドとウクライナの社会的なグループを融合するイベントへと変容してきている。ここで忘れてならないのは，大都市と小都市の図書館が持っている活動可能性の差異と，都市の規模によって著しく異なる避難民の数とニーズの差異である。ワルシャワやクラクフのような大都市の図書館は現在でも読者向けの活動としてウクライナ語蔵書の拡大を図り，教育的イベント（例えば，ポーランド語授業やウクライナ児童の学習支援）や文化イベント（ウクライナ出身の芸術家による作品展や講演会）を開催している。

自治体や施設の規模にかかわらず，図書館は常に地域社会を支援して，その要望に応じて，適切に問題解決に取り組んでいく。

（Lilianna Nalewajska：ワルシャワ大学図書館／Małgorzata Dutka訳：日本図書館協会会員，
ポーランド図書館員協会会員）

［NDC10：010.2349
BSH：1. 図書館－ポーランド
2. ウクライナ］

資料

2023（令和５）年８月１日

公益社団法人日本図書館協会
理事長　植松貞夫

令和６（2024）年度予算における図書館関係地方交付税について（要望）

常日頃より，図書館振興についてご尽力賜り，感謝申し上げます。

地方自治体が所管する図書館（公立図書館及び学校図書館）は，日々利用者のサービスに心を込めています。図書館は，学校教育や，地域社会・家庭における生涯学習施設として不可欠で重要な役割があり，その役割を果たしていかなければなりません。

しかしながら，個々の図書館の工夫だけでは難しい課題として，資料費と非正規雇用職員などの処遇改善などの職員体制の確保があります。特に図書館は経費節減すると十分なサービスの提供ができません。図書館が，市民の日常的な課題の解決や意見形成に必要な資料や情報を提供するためには，継続した図書館資料・情報の収集と専門的知識と経験を有する職員の配置が欠かせません。

このため，活字文化の推進を担い，学校における教育学習のみならず生涯学習の中核施設である図書館の振興に中長期的視野を持った財政面での支援を要望する次第です。

１　会計年度任用職員等の非正規職員の適正な任用等について

令和２（2020）年度より，会計年度任用職員制度が導入されておりますが，適正な任用や勤務条件の確保のため，令和６（2024）年度の十分な予算措置を，要望いたします。当協会では，都道府県知事・市区長あてに，非正規職員の処遇改善のお願いをお送りしました。予算措置が図書館職員の処遇改善に反映されますようあわせて地方自治体へもご依頼いただけますよう要望いたします。また，専門的職員については正規職員が配置できる予算措置をあわせて要望いたします。

２　デジタルによる図書館の環境整備の充実について

令和４年６月７日閣議決定のデジタル田園都市国家構想基本方針では図書館などの社会教育施設の活用を促して，地域の取組みにリアルな交流とデジタルの活用の相乗効果で，課題解決に向けたコミュニティ活動が活発化し，誰一人として取り残されない，デジタル社会の実現を図ることが挙げられています。主に個人が利用する図書館は，デジタル環境での個人の取組みを地域課題解決につなげるなど大きな役割を果たします。また，そのためにもかつての地域の姿を文字や映像で保管している図書館の資料のデジタルアーカイブ化をすすめることで，利活用を高めることが不可欠です。このようなことが取り組める環境整備をお願いいたします。

３　公立図書館関係経費の改善

３．１　地方交付税における基準財政需要額の充実

図書資料等購入費について，日本図書館協会の調査では，予算額で平成11（1999）年度に１館当たり1,354万円だったものが，令和４（2022）年度には840万円で，62％の規模にまで減少しており，住民が必要とする資料の確保ができない状況です。とりわけ，「外出抑制時に在宅で過ごす時間を豊かにする」電子図書館の電子書籍は，充実のための資料費を必要とします。地方交付税における基準財政需要額の「需用費等」の増額を，切に要望いたします。

３．２　公立図書館への正規の専門職員の配置

公立図書館の専任職員の状況は，日本図書館協会の調査では，専任職員数で平成11（1999）年度に１館当たり6.0人だったものが，令和４（2022）年度には2.8人で，５割弱の規模に減少しています。また，専任職員の数字は全図書館職員数の実に22％弱に過ぎません。他方，地方交付税の図書館職員の給与費は正規職員と非正規職員に充当されているものであり，現実に，図書館が果たすべき専門的かつ継続的なサービスや学校，博物館，公民館，研究所などとの連携活動に支障をきたしています。公立図書館に正規の専門職員をより多く配置できるよう，地方交付税の改善を，要望いたします。

３．３　図書館協議会経費の充実

図書館には地域の状況と住民の要望にこたえる

運営方針が確立されなければなりません。そのために平成28（2016）年度から，市（区）町村の図書館協議会にも委員報酬費を措置いただきましたこと，感謝申し上げます。全国的には，３分の２の図書館に設置されている図書館協議会経費を引き続き充実していただくよう，要望いたします。

３．４　図書館への指定管理者制度の導入の是正

指定管理者を導入する要件は，「公の施設の設置目的を効果的に達成するため必要があると認めるとき」とされています。図書館における指定管理者制度の導入は，専門的業務の存在，地域のニーズへの対応，持続的・継続的運営の観点から，図書館にはなじまないものです。その点をご理解いただき，安易な費用削減を目的とする図書館への指定管理者制度の導入を推し進めないよう要望いたします。

３．５　視覚障害者等の読書環境の整備の推進に係る経費の新設

令和２（2020）年７月に「視覚障害者等の読書環境の整備の推進に関する基本的な計画」が策定されました。この計画では，公立図書館において，視覚等の障害に関わらず内容に到達することができる書籍（以下「アクセシブルな書籍」）等の充実や，視覚障害者等の円滑な利用のための支援の充実を図ることが示され，さらに関連施策の実施にあたって，国は必要な財源の確保に努めることが明記されています。従前措置されている公立図書館関係経費に加え，各種施策を実施するため，アクセシブルな書籍・電子書籍の充実を図るための図書費の拡充，拡大読書機器，デイジープレイヤー等の読書支援機器の購入費，サピエ図書館の利用料，アクセシブルな書籍等を配送するための経費，対面朗読や録音図書等製作を行う図書館協力者への謝金，障害者サービス担当職員の人件費，障害者サービスに関する研修に参加するための旅費等の経費の新設を要望いたします。

４　学校図書館関係費の改善

４．１　学校図書館図書費の措置

新聞配備経費について，小学校及び中学校に加えて，高等学校で措置されています。しかし，初等中等教育課程で，より重要度の高い学校図書館図書費については，不読率の高い高等学校には措置されていません。高校生の読書を推進するためにも図書標準を策定され，図書費を確保いただけるよう要望いたします。

また，学校におけるGIGAスクール構想が進展し，校内へのPC配備が進んでいます。「情報リテラシー」や「メディアリテラシー」を涵養するうえで，ICT機器の環境だけでなく，多様なメディアに触れて，総合的に情報を得る力を獲得するために，図書館とICT環境の充実が両輪として必要です。しかし，学校図書館の環境は，学校図書館にWi-Fi環境が整備されない，学校司書にタブレット端末が配置されないなど，不十分な状態にあります。学校図書館のICT環境を推進するための予算措置を強く要望いたします。

また，学校図書館図書整備費等の根拠となっている第６次「学校図書館図書整備等５か年計画」が策定され予算措置がされています。全国の学校で図書整備が進むよう，自治体内で学校図書館での予算執行がされるよう各地の首長・教育委員会への働きかけを要望いたします。

４．２　特別支援学校の学校図書館の整備

3.5と同様にいわゆる「読書バリアフリー法」による基本的な計画を実効あるものとするため，整備が遅れている特別支援学校の学校図書館への予算措置をお願いいたします。様々な障害がある児童・生徒の読書環境を学校内に整備するための十分な配慮を要望いたします。

４．３　学校司書配置の改善

学校図書館における専門職として学校司書の配置は不可欠です。小学校及び中学校に学校司書の経費が措置されたことは歓迎いたします。令和２年度文部科学省調査において，学校司書は小学校で68.8％，中学校で64.1％，高等学校で63％と配置されています。しかし，すべてが１校に専任（フルタイム）ではなく又複数校兼務の任用が少なくないのが実態です。これは，各地方自治体の努力だけでは解決が難しい課題です。学校司書の配置規定が盛られた学校図書館法改正から11年目を迎える令和６（2024）年度予算においては，全学校に少なくとも１名の専任の学校司書の配置が可能となる予算措置を要望いたします。

また，司書教諭についても配置のあり方，研修の状況等十分とは言えない状況があります。改善のための予算措置及び働きかけを要望いたします。

※総務大臣，文部科学大臣，図書議員連盟会長，学校図書館議員連盟会長へ提出

［NDC10：011　BSH：図書館行政］

『図書館雑誌』バックナンバーのご案内

（定価は税込み。各号の在庫状況については，出版販売係　☎03-3523-0812に直接お問い合わせください）

◆2019年１月号（Vol.113 No.１）平成30年度（第104回）全国図書館大会ハイライト ……1,026円
◆2019年２月号（Vol.113 No.２）特集＝トピックスで追う図書館とその周辺 ……1,026円
◆2019年３月号（Vol.113 No.３）特集＝防災・減災を考える－その日に備えて ……1,026円
◆2019年４月号（Vol.113 No.４）特集＝これから図書館で働く人たちへ ……1,026円
◆2019年５月号（Vol.113 No.５）特集＝平成の図書館　ピックアップ ……1,362円
◆2019年６月号（Vol.113 No.６）特集＝図書館のウェブデザイン ……1,026円
◆2019年７月号（Vol.113 No.７）特集＝図書館の話題アラカルト ……1,026円
◆2019年８月号（Vol.113 No.８）特集＝NDC90周年とNCR2018刊行を記念して ……1,362円
◆2019年９月号（Vol.113 No.９）特集＝ボランティアとの協働を考える ……1,026円
◆2019年10月号（Vol.113 No.10）令和元年度（第105回）全国図書館大会への招待 ……1,026円
◆2019年11月号（Vol.113 No.11）特集＝スマホ世代と大学図書館 ……1,026円
◆2019年12月号（Vol.113 No.12）特集＝情報リテラシーをめぐって　学校図書館を核に／
小特集＝IFLAアテネ大会レポート ……1,362円

＊

◆2020年１月号（Vol.114 No.１）特集＝トピックスで追う図書館とその周辺 ……1,026円
◆2020年２月号（Vol.114 No.２）令和元年度（第105回）全国図書館大会ハイライト ……1,026円
◆2020年３月号（Vol.114 No.３）特集＝災害から考える図書館 ……1,026円
◆2020年４月号（Vol.114 No.４）特集＝読書バリアフリー法と図書館－一歩を踏み出す前に ……1,026円
◆2020年５月号（Vol.114 No.５）特集＝図書館とオリンピック ……1,362円
◆2020年６月号（Vol.114 No.６）特集＝児童・生徒の学びをサポート！博物館図書室 ……1,026円
◆2020年７月号（Vol.114 No.７）特集＝図書館の話題アラカルト ……1,026円
◆2020年８月号（Vol.114 No.８）小特集＝AIを活かす図書館 ……1,362円
◆2020年９月号（Vol.114 No.９）特集＝コロナ禍における図書館の現在 ……1,026円
◆2020年10月号（Vol.114 No.10）令和２年度（第106回）全国図書館大会和歌山大会への招待 ……1,026円
◆2020年11月号（Vol.114 No.11）特集＝新型コロナウイルス流行下における大学図書館の非来館型
サービス ……1,026円
◆2020年12月号（Vol.114 No.12）特集＝電子メディアと学校図書館－コロナ禍は，学校図書館の

「電子書籍元年」をもたらすか …… 1,362円

＊

◆2021年１月号（Vol.115 No.１）特集＝トピックスで追う図書館とその周辺 …… 1,026円
◆2021年２月号（Vol.115 No.２）令和２年度（第106回）全国図書館大会和歌山大会ハイライト …… 1,026円
◆2021年３月号（Vol.115 No.３）特集＝東日本大震災から10年 …… 1,026円
◆2021年４月号（Vol.115 No.４）特集＝SDGsと図書館 …… 1,026円
◆2021年５月号（Vol.115 No.５）特集＝図書館員養成100周年 …… 1,362円
◆2021年６月号（Vol.115 No.６）特集＝図書館と公民館との連携を考える …… 1,026円
◆2021年７月号（Vol.115 No.７）特集＝健康・医療情報のリテラシー …… 1,026円
◆2021年８月号（Vol.115 No.８）特集＝図書館の話題アラカルト …… 1,362円
◆2021年９月号（Vol.115 No.９）特集＝地域資料のいまとこれから …… 1,026円
◆2021年10月号（Vol.115 No.10）令和３年度（第107回）全国図書館大会山梨大会への招待 …… 1,026円
◆2021年11月号（Vol.115 No.11）特集＝国立国会図書館のデジタルシフト …… 1,026円
◆2021年12月号（Vol.115 No.12）特集＝コロナ後の学校図書館へ／
小特集＝IFLA2021オンライン大会レポート …… 1,362円

＊

◆2022年１月号（Vol.116 No.１）特集＝トピックスで追う図書館とその周辺 …… 1,026円
◆2022年２月号（Vol.116 No.２）令和３年度（第107回）全国図書館大会山梨大会ハイライト …… 1,026円
◆2022年３月号（Vol.116 No.３）特集＝図書館と命名権（ネーミングライツ） …… 1,026円
◆2022年４月号（Vol.116 No.４）特集＝広がる広げる 子どもの読書環境としての公共図書館の今 …… 1,026円
◆2022年５月号（Vol.116 No.５）特集＝電子書籍と公共図書館－非来館型サービスとしての電子図書館 …… 1,362円
◆2022年６月号（Vol.116 No.６）特集＝図書館の広報を考える …… 1,026円
◆2022年７月号（Vol.116 No.７）特集＝図書館の話題アラカルト …… 1,026円
◆2022年８月号（Vol.116 No.８）特集＝認知症にやさしい図書館を目指して …… 1,362円
◆2022年９月号（Vol.116 No.９）令和４年度（第108回）全国図書館大会群馬大会への招待 …… 1,026円
◆2022年10月号（Vol.116 No.10）特集＝大学にある児童図書館（室） …… 1,026円
◆2022年11月号（Vol.116 No.11）特集＝図書館と個人文庫・文学館 …… 1,026円
◆2022年12月号（Vol.116 No.12）特集＝「情報活用能力」－学校教育と図書館の未来をつなぐ／
小特集＝IFLAダブリン大会レポート …… 1,362円

＊

◆2023年１月号（Vol.117 No.１）令和４年度（第108回）全国図書館大会群馬大会ハイライト …… 1,026円
◆2023年２月号（Vol.117 No.２）特集＝トピックスで追う図書館とその周辺 …… 1,026円
◆2023年３月号（Vol.117 No.３）特集＝図書館の空間をデザインする …… 1,026円
◆2023年４月号（Vol.117 No.４）特集＝コロナ後の図書館員の学び・交流 …… 1,026円
◆2023年５月号（Vol.117 No.５）特集＝県立図書館は今 …… 1,362円
◆2023年６月号（Vol.117 No.６）特集＝既存図書館のリニューアル …… 1,026円
◆2023年７月号（Vol.117 No.７）特集＝図書館の話題アラカルト …… 1,026円
◆2023年８月号（Vol.117 No.８）特集＝図書館と展示－資料から広がる世界 …… 1,362円
◆2023年９月号（Vol.117 No.９）特集＝図書館のビジュアルアイデンティティ …… 1,026円
◆2023年10月号（Vol.117 No.10）令和５年度（第109回）全国図書館大会岩手大会への招待 …… 1,026円

会員募集のご案内－会員の皆さまへ

日本図書館協会（JLA）では正会員，準会員，賛助会員を募集しております。

本法人は，全国の図書館の発展，文化の進展を図る事業を行うことにより，人々の読書や情報資料の利用を支援し，もって文化，学術，科学の振興に寄与することを目的としています（定款第3条）。

これからの日本の図書館界に清新な活力を注いでくださる皆さまのご参加を求めています。会員の皆さまにおいては積極的な勧誘をよろしくお願い申し上げます。

詳細については本法人ホームページ「入会のご案内」をご覧ください。

https://www.jla.or.jp/membership/tabid/270/Default.aspx

日本図書館協会の活動を豊かなものにするために

ご寄附のお願い

本法人は，全国の図書館の進歩・発展を図るため，図書館運営の支援および政策提言，図書館職員の育成並びに研修・講習や図書館運営に関する調査・研究・資料収集，機関誌等の刊行など，図書館活動を通じたさまざまな事業を展開しています。

こうした公益目的にかなう事業のさらなる充実を図り，21世紀のよりよい文化的社会を築いていくため，広く市民や会員の皆さまからのご寄附を受け付けております。

なお，本法人への寄附金には特定公益法人としての税制上の優遇措置が適用され，所得税・法人税の控除が受けられます。

詳細については本法人ホームページ「ご寄附について」をご覧ください。

https://www.jla.or.jp/jla/tabid/457/Default.aspx

charibon（チャリボン）by VB

あなたの本のご寄附が全国の図書館を支えます。

皆様の読み終えた本が図書館をサポートする活動に役立ちます。ご提供いただいた書籍、CD、DVD等を提携会社が買い取り、代金が日本図書館協会への寄附金となります。段ボールに詰めてご連絡ください。5冊（点）以上なら送料はかかりません。

古本を寄附 書籍類を梱包 › 集荷 配送会社 › 仕分け・査定 VALUE BOOKS › ファンドレイジング 日本図書館協会

5冊から送料無料　　買取相当額の寄附

https://www.charibon.jp/partner/jla/　TEL:0120-826-295（バリューブックス）

日図協図書館 新着案内

●配列と記載事項について
単行書：『日本十進分類法』による分類記号順（NDC記号順）とし，同一分類記号内は書名の欧文，数字，五十音順とした。
「タイトル　巻次　著者　出版社　出版年月　ページ数　大きさ　（叢書名）　注記　ISBN　価格　NDC記号」
要覧：館種別，都道府県（県，政令指定都市・特別区，市，町村）順
「タイトル　巻次　編者・出版社　出版年月　ページ数　大きさ」
館報：館種別，都道府県（県，政令指定都市・特別区，市，町村）順
「タイトル　巻次　編者・出版社　出版年月」
機関誌・団体報：館種，テーマによるNDC記号順
「タイトル　巻次　編者・出版社　出版年月　ページ数　大きさ　注記　NDC記号」
記事索引：『日本十進分類法』による分類記号順（NDC記号順）とし，同一分類記号内は記事タイトルの欧文，数字，五十音順とした。
「記事タイトル　著者　掲載誌　巻号　掲載ページ　掲載年月」

図書館関係 図書・資料・記事目録

単行書　紀要掲載論文
報告書・資料集・論文集など

From information literacy to social epistemology : insights from psychology　Anthony Anderson ; Bill Johnston Chandos Pub., an imprint of Elsevier 2016 xv,165p　23cm　(Chandos information professional series)　978-0-08-100545-3　010

図書館ウォーカー　旅のついでに図書館へ　オラシオ著　日外アソシエーツ　2023.01　229p　21cm　978-4-8169-2952-6　¥2300　010.21

闘う図書館　アメリカのライブラリアンシップ　豊田恭子著　筑摩書房　2022.10　248p　19cm　（筑摩選書0239）　978-4-480-01758-1　¥1600　010.253

図書館魔女の往復書簡　黒山羊・白山羊の50年　松本良子著；大島真理著　郵研社　2023.08　243p　19cm　978-4-907126-60-5　¥2000　010.4

小さなまちの奇跡の図書館　猪谷千香著　筑摩書房　2023.01　190p　18cm　（ちくまプリマー新書　419）　978-4-480-68444-8　¥800　013

NCR2018の要点解説　資源の記述のための目録規則　蟹瀬智弘著　樹村房　2023.09　13,184p　19cm　978-4-88367-383-4　¥2000　014.32

Broad system of ordering (BSO)　川村敬一著　樹村房　2023.08　91p　21cm　978-4-88367-382-7　¥2000　014.45

カビ対策パーフェクトセミナー　図書館員，必見！　明治クリックス　[2023]　31p　26cm　¥1000　014.612

夢見る「電子図書館」　中井万知子著　郵研社　2023.09　279p　21cm　978-4-907126-59-9　¥2500　016.11

学校図書館改革の30年　学校図書館法公布の70年　学校図書館法公布70周年記念事業運営委員会　2023.08　60p　26cm　017

「学び」と「集い」の図書館に挑む　大学図書館の未来と創造　大正大学附属図書館著；稲井達也監修　大正大学出版会　2023.09　195p　26cm　978-4-909099-81-5　¥2400　017.7136

歴史資料の宝庫松平文庫への誘い　引き継がれし福井藩・越前国の記憶　福井県立図書館編集　福井県立図書館　2007.07　15p　30cm　090

要覧
年報・年史・業務報告・利用案内など

さいたま市図書館要覧　令和5年度　さいたま市立中央図書館　2023.07　107p　30cm　図書館要覧　令和5年度　戸田市立図書館　2023.08　48p　30cm

図書館要覧　令和5年度　新座市立中央図書館　2023.09　39p　30cm

浦安市立図書館概要　令和4年度　40　浦安市立図書館　2022.10　84p　30cm

事業概要　令和5年度版　東京都立中央図書館　2023.07　52p　30cm

しんじゅくの図書館　2023　新宿区立中央図書館　2023.09　108p　30cm

ぶんきょうの図書館　令和5年度版（令和4年度実績）文京区立真砂中央図書館　2023.09　73p　30cm

武蔵野市の図書館 令和4年度 事業報告 武蔵野市教育委員会教育部図書館 2023.08 165p 30cm

相模原市の図書館 令和4年度事業実績 (2023) 相模原市立図書館 2023.08 64p 30cm

磐田市の図書館 図書館の概要 (令和5年度) 磐田市立中央図書館 2023.09 34p 30cm

図書館年報 令和4年度 精華町立図書館 2023.07 26p 30cm

堺市立図書館概要 令和4年度 統計と活動 (令和5年度) 堺市立中央図書館 2023.07 52p 30cm

姫路市の図書館 令和5年度 (2023年度) 姫路市立城内図書館 2023.07 136p 30cm

倉敷の図書館 図書館要覧 第42号 令和5年 倉敷市立図書館 2023.07 52p 30cm

山口県大学ML (Museum・Library) 連携事業報告 令和4年度 展示テーマ『追想』 山口県大学ML連携事業実行委員会事務局 [2023] 9p 30cm

館報 協会報 機関誌

●日本図書館協会

図書館雑誌 The Library Journal 117(9) (通巻1198) 日本図書館協会図書館雑誌編集委員会 日本図書館協会 2023.09 60p [556-616p] 26cm 通巻1198号 内容：特集 図書館のビジュアルアイデンティティ，DXの進展と図書館 (溝上智恵子) (窓)，視覚障害者等の読書環境の整備の推進に係る関係者協議会，開催 (NEWS)，「電子図書館のアクセシビリティ対応ガイドライン1.0」公表 (NEWS)，「IFLA-UNESCO公共図書館宣言2022」について (NEWS)，第109回全国図書館大会岩手大会参加申し込み受付中 (NEWS)，全国学校図書館協議会 (全国SLA) 2023年度「学校図書館用図書平均単価」を発表 (NEWS)，『図書館年鑑 2023』出版 (NEWS)，IFLA WLIC 2024開催に関する会員投票について (NEWS)，タイのコンケーン大学でI-LISS 2023が開催 (NEWS)，司書の復職を求めた署名活動を実施 (NEWS)，第77回「読書週間」実施要領 (NEWS)，「Web OYA-bunko」リニューアル (NEWS)，図書館カードの家族利用を考える (こらむ図書館の自由)，図書館におけるビジュアルアイデンティティの導入事例 (近藤聡)，図書館におけるビジュアルアイデンティティの作り方 (木住野彰悟)，太田市美術館・図書館におけるデザインのオリジナル性 綿密に設計された，永く愛されるためのビジュアルアイデンティティ (平野篤史)，手と手を寄せ合い，重ねて，協力する施設「tette」の愛称とロゴマークについて (小針望)，オーテピアの開館とロゴマークの作成プロセス (高知県教育委員会事務局生涯学習課 高知市教育委員会図書館・科学館課)，三鷹市立図書館におけるロゴマーク作成の顛末と課題 (大地好行)，令和4年度「読書活動推進事業」の取り組み事例について，学校図書館を活用した授業づくりと本に親しみ，学びを深める場づくりをめざして 大阪府「学校図書館を充実・活用するためのモデル校」の取り組みから (霞が関だより 238)，図書館災害対策委員会の災害支援活動会計報告 (2022年度)，「自分事として考える羅針盤に」「アップデートする司書と業界団体」(声－各地の代議員から 6)，兵庫県立図書館のレファレンス (れふぁれんす三題噺 304 兵庫県立図書館の巻)，地域を変革する七つのステップ アメリカ図書館協会 (ALA) 報告書より (豊田恭子)，図書館員のおすすめ本 81，香川県内公共図書館連携企画「#つながる図書館」(北から南から)，名古屋市図書館100周年 図書館のあゆみとこれから，自動車図書館，BMサミット開催！ (北から南から) 010.5

●国立国会図書館

国立国会図書館月報 749/750 国立国会図書館 2023.09 32p 30cm 2023年9/10月号 内容：牧野富太郎の手紙－辛夷はコブシ，にあらず (今月の一冊 国立国会図書館の蔵書から)，ひなぎくでみる震災の記録，憲政資料のなかの関東大震災，ごぞんじですか？ NDL Ngram Viewer，辞書編集の立場から (NDL Ngram Viewerを使ってみました 1)，寝不足の震度4 (館内スコープ)，概説高輪築堤 (本屋にない本) 016.11

レファレンス 873 国立国会図書館調査及び立法考査局 2023.09 82p 30cm 016.11

●協会報・館報

情報図書館だより 2023年9月-10月 401-402 江別市情報図書館 2023.08-09

図書館通信 42(6) 508 登別市立図書館 2023.09

ハトダヨ 函館市中央図書館だより 88 函館市中央図書館 2023.09

よむみる 371 恵庭市立図書館 2023.08

まなべル 生涯学習情報誌 2023年 (令和5年) 9月号 353 訓子府町教育委員会 2023.09

花さき山 431 筑西市立明野図書館 2023.09

図書館だより 2023年9月号 472 新座市立図書館編集 新座市立図書館 [2023.08]

三郷市図書館だより 2023/8・9月号 319 [三郷] 市立図書館 2023.08

たからじまだより 2023. 9・10月号 247 みさとしとしょかん 2023.08

としょ丸しんぶん 69 さいたま市立中央図書館 2023.01

Book Mark 城西大学水田記念図書館報 2023.9・10 165 城西大学水田記念図書館 [2023.09] 内容：過去・現在・未来の図書館

子どもの読書活動推進センター通信 4 千葉県立中央図書館 2023.08

日野市立図書館館報 ひろば 2023年9月号 289 日野市立中央図書館 [2023.09] 内容：夏休みジュニアスタッフ2023体験報告

西東京市図書館だより 91 西東京市図書館編集 西東京市図書館 2023.09 内容：西東京市子ども電子図書館始まりました

ひばり いなぎ図書館だより 207 稲城市立図書館 2023.09 内容：稲城市立図書館50周年記念事業

としょかん 178 茅ヶ崎市立図書館 2023.09 内容：見習い図書館員ものがたり

図書館だより 199 藤沢市総合市民図書館 2023.09 内容：辻堂市民図書館 開館30周年！，ほか

パピルス 上越市立図書館だより 306 上越市立図書館編集 上越市立図書館 2023.09

磐田市図書館だより 2023年9月号 222 [磐田市立中央図書館] [2023.08] 内容：2023年上半期貸出数ランキング一般書ベスト3

かけがわ図書館だより 223-224 掛川市立図書館 2023.09

ひまわりだより 413-414 貝塚市民図書館 2023.09-10

としょかんだより 481 寝屋川市立中央図書館 2023.09

しずく通信 233 猪名川町立図書館 2023.09 しずくつうしんfor KID'S 173

みんなの本だな 図書館だより 659 芦屋市立図書館 2023.09

図書館だより 9月号 岩国市図書館広報 355 岩国市中央図書館 [2023.09]

●機関誌・団体報

情報の科学と技術 73(9) 情報科学技術協会 2023.09 54p [361-414p] 30cm 内容：特集 図書館システムのお引越し 図書館・学術情報システムの移行のポイント，電気通信大学附属図書館におけるEx Libris社製Almaの導入について：国立大学における事例，公立図書館におけるシステム更新とデータ移行仕様書，三兎を追って－オーテピア高知図書館情報システム構築記，みどりの図書館東京グリーンアーカイブス 独自システムからのシステム移行について，「こうとけんさく」埼玉県の高校図書館が取り組む総合目録，知的業務における効率的な特許検索と精査方法，そして企業の経営戦略に貢献するには，J-STAGE登載資料の特長分析－情報科学分野を対象として，『続・アーカイブズ論 記録のしくみと情報社会』『3訂 図書館と情報技術 検索技術者検定3級 対応』（書評・新刊紹介） 007

図書館文化史研究 40 日外アソシエーツ株式会社 2023.09 203p 21cm 内容：図書館史研究の中の現代史－図書館観と規範から（福井佑介），近代日本における公共図書館調査に関する基礎的検討（仲村拓真），若き朝河貫一の資料収集への情熱－イェール大学図書館長との往復書簡を中心に（松谷有美子），文部省初代学校図書館担当深川恒喜の図書館認識（根本彰），コロナ禍で『図書館学の五法則』を読み直すということ（高橋隆一郎），『図書館の日本文化史』『「大東亜」の読書編成：思想戦と日本語書物の流通』『社会を映し出す『図書館の権利宣言』』 010.21

LISN 197 キハラ株式会社マーケティング部 2023.09 25p 26cm 内容：特集 危険，危機を考える クライシス・マネジメントの犯罪原因論とリスク・マネジメントの犯罪機会論（小宮信夫），子どもたちへの安全教育の考え方と進め方について（藤田大輔），「防災／防犯リテラシー」の獲得とそのための「リスクコミュニケーション」（松川杏寧），公害経験とネットワークによる学び（林美帆），東洋大学赤羽台図書館開設奮闘記（新屋良子），連載で広げ，届ける読書バリアフリー（連載 読書バリアフリーを進めるアイデアと工夫）（野口武悟），『確かめながら 学校図書館と1人1台端末 ひろがる！つながる！学校図書館』（資料紹介） 010.5

図書館界：The Library World 75(3) 432 日本図書館研究会 2023.09 32p [187-218p] 26cm 内容：特集 誌上対話 第14回国際図書館学セミナーの開催について（ご案内）[綴込]，子どもの「学び」と「生活」のセーフティネットとしての学校図書館（座標），地域社会において公共図書館が担うべき役割と責任～実践と研究をつなぐ誌上対話～，今後の地域社会と図書館に関する論点，2021年著作権法改正に

よる第31条の改正－どのようなサービスなのか－（テーマ 4 何が変わる？図書館サービス－著作権法の権利制限規定の見直しを巡って No.1），『帝国図書館：近代日本の「知」の物語』『塩見昇の学校図書館論：インタビューと論考』『調べる技術：国会図書館秘伝のレファレンス・チップス』（書評） 010.5

もっと！TRC MARCpedia 5 図書館流通センターデータ部 2023.09 ［4p］ 30cm 内容：典拠ファイルってなに？ 014

ヤングアダルトサービス研究会通信 2023.8-9 286 ヤングアダルトサービス研究会 2023.09 11p 26cm 内容：7月例会記録と感想 015.93

音ボラネット通信 全国音訳ボランティアネットワーク会報 49 全国音訳ボランティアネットワーク事務局 2023.09 12p 30cm 内容：付録：第9回総会・講演会 報告書（2023年7月3日（月） 於：アルカディア市ヶ谷） 015.97

みんなの図書館 558 教育史料出版会（発行） 2023.09 80p 21cm 10月号 内容：特集 過去を振り返ることは未来につながる ほか，過去を振り返ることは未来につながる－大阪支部55年史刊行に関わって（脇谷邦子），『「図書館」のないときからあるときへ』を読んで～図書館の仕事で大切なことはみんな図問研の先輩に教わった～（横田幸恵），指定管理者制度の困難（森下芳則），会計年度任用職員として雇止めにあって（匿名），部落差別事象と図書館をめぐるあれこれ－「西と東」「同対」その他（村岡和彦），アナログからデジタル時代へ 編集者45年間で図書館の利用術はこう変わった（坪井賢一），一般行政職・司書資格保有図書館長の眼からみた日本の公立公共図書館の現状－Z＊＊市立図書館長Bokuの思いと考え（山本順一），滞在型図書館というけれど（こんな図書館はいやだ 23）（山重壮一），男木島図書館便り56（額賀（福井）順子），それぞれの“青い鳥”のために（column：図書館九条の会）『塩見昇の学校図書館論 インタビューと論考』『学校図書館を探検しよう』『アンフォーレのつくりかた 図書館を核としたにぎわいの複合施設』（ほん・本・Book），016.206

風 136 守谷の図書館を考える会 2023.09 6p 30cm 016.206

としょかんふれんず千葉市 75 としょかんふれんず千葉市 2023.09 12p 30cm 内容：としょかんふれんず千葉市 図書館見学記 佐倉市立佐倉図書館と佐倉順天堂記念館 016.206

L／T江東区図書館友の会会報 秋号 81 江東区図書館友の会 2023.09 6p 30cm 内容：江東区図書館友の会第20回総会報告 016.206

静岡図書館友の会会報 30 静岡図書館友の会 2023.09 8p 30cm 016.206

走れ！きぼうGO 9 たかつきライブラリーフレンズ（TLF） 2023.09 4p 30cm 内容：嶋田学氏講演会「図書館の未来を考える－子ども・おとな・まち育て」 016.206

友の会通信 図書館友の会・米子会報 38 図書館友の会・米子事務局 2023.09 6p 30cm 内容：「モンゴル図書館の煉瓦壁に眠る万葉集」の地を訪ねて 016.206

児図研東京支部ニュース 446 児童図書館研究会東京支部 2023.09 10p 26cm 016.286

こどもの図書館 70(9) 児童図書館研究会 2023.09 16p 26cm 016.286

マグちゃん通信 2023 10-11 82 射水市大島絵本館 ［2023］ 6p 30cm 内容：絵本作家インタビュー accototo ふくだとしお＋あきこ 016.286

京庫連だより 2023-4 京都家庭文庫地域文庫連絡会 2023.09 8p 26cm 付録：「読み継がれている我が家での名作」（もみじ文庫 ばあちゃん） 内容：戦争と平和を考える「子どもの本展」 016.29

親子読書つうしん 日本親子読書センター機関誌 3(16) 日本親子読書センター 2023.09 36p 30cm 内容：特集1 第59回夏のつどい報告，特集2 楽しみ，学ぼう，中近東の世界 第4回 016.29

ふみくら 207 千葉市文庫連絡協議会 2023.09 8p 30cm 内容：読書バリアフリー研究会特別研修「読書のバリアフリーをすすめるために」を視聴して 016.29

子どもと読書 461 親子読書地域文庫全国連絡会 2023.9-10 40p 21cm 2023/9·10 内容：特集 学校図書館をいかす－学校図書館法公布70周年 016.29

学図研ニュース 451 学校図書館問題研究会 2023.09 28p 26cm 内容：特集 学校図書館への公的支援 017.06

学校図書館速報版 2134-2135 全国学校図書館協議会 2023.09 2冊 26cm 内容：(2134) 質の高い学校図書館の実現を：学校図書館法公布70周年記念式典開催 017.06

学校図書館 875 全国学校図書館協議会 2023.09 88p 26cm 内容：特集 読書イベントを楽しもう！，知的障害のある人の読書を支援する－LLブックの活用（教育時評 298），生徒と本をつなげる図書委員会の

活動（キラリ！司書教諭 228），図書館リニューアル大作戦－館内で，校内で，変化の「種探し」を楽しもう（きらり！学校司書 62），〈実践研究〉読書指導と環境の改善(3)－学校図書館賞の分析を実践に生かす，公益社団法人全国学校図書館協議会 第42回理事会，「電子図書館のアクセシビリティ対応ガイドライン1.0」の学校図書館における意義と活用方法 017.06

図書館教育ニュース（付録） 1635-1637 少年写真新聞社 2023.09 3冊 26cm 内容：(1635) 昼休み放送でビブリオバトル！（実践報告），(1637) 目をあけて，言語沼から野辺を唄う（図書ニュー読書部2023活動中 第5回） 017.1

小学図書館ニュース（付録） 1303-1305 少年写真新聞社 2023.09 3冊 26cm 内容：(1303) 本が好きな子が増える図書環境づくり（実践報告），(1304) 1年目！新米司書フントー記 第5歩 耳で聞いて楽しむ読書「みみどく」中学校編，(1305) ブックトークで伝えるSDGs 第5回 017.2

私立大学図書館協会会報 160 私立大学図書館協会 2023.09 142p 30cm 明治学院大学図書館内 内容：私立大学図書館協会東西地区部会 2022年度会務報告，2022年度東地区部会研究講演会，2022年度東地区部会研究部研修会，2022年度東地区部会研究部研修報告大会，2022年度西地区部会研究会，テーマ：大学図書館が担う教育のためのインストラクショナルデザイン，インストラクショナルデザインとは（向後千春），大学図書館でインストラクショナルデザインが必要とされる背景（野末俊比古），大学図書館でのインストラクショナルデザイン（兵藤健志，星子奈美），テーマ：電子ブックの活用を考える，電子図書館サービスLibrariE活用事例（蔵本祐史），慶應義塾大学におけるDDAの取り組み（藤本優子），デジタル出版市場の現状と流通事情について（鷹野凌），国立国会図書館の個人向けデジタル化資料送信サービスとその周辺（福林靖博），テーマ：大学図書館×SDGs～「誰ひとり取り残さない」大学図書館の実現へ向けて，幾央大学図書館における「SDGs」の取り組み（岸本きみえ），司書課程におけるSDGsへの取り組みと大学図書館への還元－ジェンダー平等・教育機会の保障・貧困格差の解消をテーマとする活動から（山口真也），金城学院大学図書館のささやかな取り組み－３つの事例（酒井麻理） 017.706

国立公文書館ニュース 35 国立公文書館 2023.09 7p 30cm 内容：特集 数字で見る国立公文書館 018.09

薬学図書館 68(2) 258 日本薬学図書館協議会 2023.08 44p［46-80p］ 30cm 内容：特集 日本薬学図書館協議会 学術シンポジウム2022，018.499

日本農学図書館協議会誌 211 日本農学図書館協議会 2023.09 32p 30cm 内容：理系司書の養成：東京農業大学の場合（村上篤太郎），牧野富太郎生誕160年記念特別企画展の記録「牧野博士と図鑑展」（藤川和美），ウェルネスとテクノロジーを主眼として拡張型図書館サービスの検討：香港聖公会明華神学院図書館による国際パートナーシップの取り組み（張秀貞，広瀬容子） 018.61

博物館研究 58(9) 664 日本博物館協会 2023.08 52p 30cm 内容：特集 博物館を支える組織（協会・協議会）の役割，069

江戸東京博物館NEWS 118 東京都江戸東京博物館 2023.07 ［4p］ 30cm 内容：図書室からお知らせはじまっています！ 閲覧サービス 069

日本近代文学館 315 日本近代文学館 2023.09 16p 26cm 910

●出版・著作権

Bookstart Newsletter 2023秋 82 NPOブックスタート 2023.09 8p 30cm 内容：特集 2024・2025・2026年度「ブックスタート赤ちゃん絵本」が決定，019

読書推進運動 669 読書推進運動協議会 2023.08 8p 26cm 019

コピライト 749 著作権情報センター 2023.09 64p 30cm 内容：テーマで学ぶデジタル社会の著作権制度 第6回 著作者人格権 021.2

JASRAC NOW 788 日本音楽著作権協会 2023.09 11p 30cm 021.23

JPIC NEWSLETTER 247 出版文化産業振興財団（JPIC） 2023.09 ［1p］ 30cm 023

アクセス 地方小出版情報誌 560 地方・小出版流通センター 2023.09 12p 26cm 内容：地方紙の出版活動について感じたこと 023

出版クラブだより 出版クラブ会報 619 日本出版クラブ 2023.09 12p 26cm 内容：日本出版クラブ創立70周年記念号，写真と年表で振り返る－出版クラブの70年 023

人文会ニュース 144 人文会 2023.08 52p 21cm 内容：企画展示と図書館－展示を通した司書の人材育成（図書館レポート） 023

こどもの本 613 日本児童図書出版協会 2023.10 40p

21cm 023.09

子どもの本棚 659-660 日本子どもの本研究会 2023.09-10 2冊 21cm 023.09

日本古書通信 1130 日本古書通信社 2023.09 47p 26cm 024.8

図書館関係雑誌記事索引

010 電子図書館

DXの進展と図書館 溝上智恵子 (窓) 図書館雑誌 117(9) p556 2023.09

「電子図書館のアクセシビリティ対応ガイドライン1.0」公表 (NEWS) 図書館雑誌 117(9) p557 2023.09

010.1 図書館の自由

図書館カードの家族利用を考える 津田さほ (こらむ図書館の自由) 図書館雑誌 117(9) p559 2023.09

010.6 国際図書館連盟 (IFLA)

IFLA WLIC2024開催に関する会員投票について (NEWS) 図書館雑誌 117(9) p558 2023.09

010.6 全国図書館大会

第109回全国図書館大会岩手大会参加申し込み受付中 (NEWS) 図書館雑誌 117(9) p557 2023.09

010.6 図書館ー団体

タイのコンケーン大学でI-LISS 2023が開催 (NEWS) 図書館雑誌 117(9) p558 2023.09

010.6 日本図書館協会

「自分事として考える羅針盤に」「アップデートする司書と業界団体」 今野千束, 田中裕子 (声ー各地の代議員から 6) 図書館雑誌 117(9) p589 2023.09

図書館災害対策委員会の災害支援活動会計報告 (2022年度) JLA図書館災害対策委員会 図書館雑誌 117(9) p588 2023.09

『図書館年鑑 2023』出版 (NEWS) 図書館雑誌 117(9) p558 2023.09

013.1 図書館職員. 人事管理

司書の復職を求めた署名活動を実施 (NEWS) 図書館雑誌 117(9) p559 2023.09

013.7 図書館の広報ーシンボルマーク

オーテピアの開館とロゴマークの作成プロセス 高知県教育委員会事務局生涯学習課 高知市教育委員会図書館・科学館課 (特集 図書館のビジュアルアイデンティティ) 図書館雑誌 117(9) p580-581 2023.09

手と手を寄せ合い, 重ねて, 協力する施設 「tette」の愛称とロゴマークについて 小針望 (特集 図書館のビジュアルアイデンティティ) 図書館雑誌 117(9) p577-579 2023.09

図書館におけるビジュアルアイデンティティの作り方 木住野彰悟 (特集 図書館のビジュアルアイデンティティ) 図書館雑誌 117(9) p570-573 2023.09

図書館におけるビジュアルアイデンティティの導入事例 近藤聡 (特集 図書館のビジュアルアイデンティティ) 図書館雑誌 117(9) p566-569 2023.09

三鷹市立図書館におけるロゴマーク作成の顛末と課題 大地好行 (特集 図書館のビジュアルアイデンティティ) 図書館雑誌 117(9) p582-583 2023.09

013.7 図書館の広報ーデザイン

太田市美術館・図書館におけるデザインのオリジナル性 綿密に設計された, 永く愛されるためのビジュアルアイデンティティ 平野篤史 (特集 図書館のビジュアルアイデンティティ) 図書館雑誌 117(9) p574-576 2023.09

015.2 レファレンス ワーク

兵庫県立図書館のレファレンス 黒住由美子 (れふぁれんす三題噺 304 兵庫県立図書館の巻) 図書館雑誌 117(9) p590-591 2023.09

015.8 展示

香川県内公共図書館連携企画「#つながる図書館」 香川県図書館協会事務局 (北から南から) 図書館雑誌 117(9) p598-600 2023.09

015.97 障害者サービス

視覚障害者等の読書環境の整備の推進に係る関係者協議会, 開催 (NEWS) 図書館雑誌 117(9) p557 2023.09

016.2 公共図書館

「IFLA-UNESCO公共図書館宣言2022」について (NEWS) 図書館雑誌 117(9) p557 2023.09

016.2137 公共図書館ー神奈川県

神奈川県立図書館 本館 (神奈川) 森谷芳浩 (新館紹介) 図書館雑誌 117(9) p565 2023.09

016.2141 公共図書館ー新潟県

三条市立図書館 (新潟) 篠原智子 (新館紹介) 図書館雑誌 117(9) p565 2023.09

016.2152 公共図書館ー長野県

大桑村図書館 (長野) 新井由美 (新館紹介) 図書館雑誌 117(9) p565 2023.09

016.2154 公共図書館ー静岡県

浜松市立中央図書館 (静岡) 内藤真澄 (新館紹介) 図

書館雑誌 117(9) p565 2023.09

016.2155 公共図書館ー愛知県

名古屋市図書館100周年 図書館のあゆみとこれから，自動車図書館，BMサミット開催！ 大井亜紀 (北から南から) 図書館雑誌 117(9) p600-601 2023.09

016.2184 公共図書館ー高知県

香美市立図書館（高知） 門脇真里 (新館紹介) 図書館雑誌 117(9) p565 2023.09

016.253 図書館（公共）ーアメリカ合衆国

地域を変革する七つのステップ アメリカ図書館協会（ALA）報告書より 豊田恭子 図書館雑誌 117(9) p592-595 2023.09

017 学校図書館

全国学校図書館協議会（全国SLA），2023年度「学校図書館用図書平均単価」を発表 (NEWS) 図書館雑誌 117(9) p558 2023.09

017 学校図書館ー大阪府

学校図書館を活用した授業づくりと本に親しみ，学びを深める場づくりをめざして 大阪府「学校図書館を充実・活用するためのモデル校」の取り組みから 持田裕一 (霞が関だより 238) 図書館雑誌 117(9) p584-587 2023.09

018 専門図書館

「Web OYA-bunko」リニューアル (NEWS) 図書館雑誌 117(9) p559 2023.09

019 読書．読書法

第77回「読書週間」実施要領 (NEWS) 図書館雑誌 117(9) p559 2023.09

019.5 読書

令和4年度「読書活動推進事業」の取り組み事例について 文部科学省 (霞が関だより 238) 図書館雑誌 117(9) p584 2023.09

019.9 書評

『うんち学入門 生き物にとって「排泄物」とは何か』『SNSの哲学 リアルとオンラインのあいだ』『シンクロと自由』『美術作品の修復保存入門 古美術から現代アートまで』 飯田眞佐子，眞鍋由比，渡邊桂子，鈴木奏穂 (図書館員のおすすめ本 81) 図書館雑誌 117(9) p596-597 2023.09

図書館雑誌／12月号予告 (Vol.117 No.12) 特別定価1362円 12月20日発行予定

特集：2023年学校図書館の今（仮題） 予定内容＝学校図書館法70周年を懸案課題打開の起点に（塩見昇），学校図書館法 2014年法改正前後から現在まで（高橋恵美子），学校図書館におけるデジタル情報資源の活用（千田つばさ），「デジとしょ信州」の活用状況（宮崎摩紀ほか），学校図書館と読書バリアフリーの現状と課題（学校図書館等における読書バリアフリーコンソーシアム）。**小特集：IFLAロッテルダム大会レポート**（三浦太郎，長塚隆，庭井史絵，高橋美貴）。以上のほか，**〈小規模図書館奮戦記㊼北海道・町立様似図書館〉**「ユネスコ世界ジオパーク」の町で30年（小川静香），**〈れふぁれんす三題噺㊼熊本県立熊本聾学校図書館〉**「聾学校のレファレンス」（池浦雅子），**〈ウチの図書館お宝紹介！㊱葛飾区立中央図書館〉**「栗本薫・中島梓コレクション」「加太こうじコレクション」（田中雅志・鈴木慶子）等の連載，2023年度通算第３回（定時第３回）理事会議事録・資料，本誌第117巻総索引等を掲載して増ページでお届けします。

編集手帳

今月号の特集は「表現する図書館員－書くことのすすめ」をテーマに，多様な分野で執筆活動を行っておられる図書館員の方々等に寄稿していただきました。

呑海氏の寄稿「図書館員が執筆するということ」にあるとおり，図書館で働くなかで執筆する機会は多数あります。館内の連絡や起案から，関係機関とのやりとり，多くの利用者向けの案内まで，本誌読者の多くも「執筆」されたことがあるでしょう。当たり前のことを特集しているのでは，と思われた方もいらっしゃるかもしれません。

しかし，それらと今回の特集で取り上げた「表現」の間には，大江氏の「論文」，坂井氏の「コラム」，高田氏の「本」など，ボリュームや関わる人，読者などにおいてある程度の違いがあります。とても普通の図書館員にはできないことを特集しているのでは，と思われた方もまたいらっしゃるかもしれません。

私事で恐縮ですが，私も海外の司書学校で講師を務めた際に講義資料をすべてゼロから作成したことをはじめ，帰国後も館内外でそれなりの頻度で執筆・発表を行っています。一方で，帰国後のあれこれは単著などには至らず，「表現」のレベルであるかというとまだまだでしょう。日常的な執筆と練り上げられた表現との間の断絶を超えることは，一見，容易ではないようにも思えます。

しかし，今回の寄稿の中でも，初挑戦に近い執筆の経験を語ってくださった方から，比較的短めの記事を数多く書かれている方，単著を複数ものされた方まで，記事の色合いにはグラデーションがあります。ひとつひとつの寄稿を読み比べて，順を追って考えていけば，意外と乗り越えるべき壁は低い，断絶というほどのものはないと思えるのではないでしょうか。

表現することは考えを整理することにもつながり，自身，職場，図書館界の発展に有益であると感じます。今回の特集が，より多くの本誌読者のみなさまが「表現」する一助となれば幸いです。　（宇野亮一）

事務局カレンダー

＊○印の日が事務局のお休みです。

■2023年11月

日	月	火	水	木	金	土
＊	＊	＊	1	2	③	④
⑤	6	7	8	9	10	⑪
⑫	13	14	15	16	17	⑱
⑲	20	21	22	㉓	24	㉕
㉖	27	28	29	30	＊	＊

■2023年12月

日	月	火	水	木	金	土
＊	＊	＊	＊	＊	1	②
③	4	5	6	7	8	⑨
⑩	11	12	13	14	15	⑯
⑰	18	19	20	21	22	㉓
㉔/㉛	25	26	27	28	㉙	㉚

※事務局の仕事納めは12月28日（木）です。